
真・恋姫†無双-白龍翔天-

蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 - 白龍翔天 -

【Nコード】

N41190

【作者名】

蒼

【あらすじ】

恋姫たちの世界へ降り立った『天の御遣い』北郷一刀くんが（多分）ハムの人✓に行く物語。

内政は（作者が）勉強タイム！

現時点（第10話時点）の登場のオリキャラ……田豫（楓）：文官
董白（朧）：武官、董卓の妹

ご挨拶

～ご挨拶改訂版～

皆さん初めまして、龍華と申します。

処女作にて、あたたかく見守ってもらえると嬉しいです。

～作品について～

・真・恋姫†無双2次創作

・原作未プレイ

・原作知識はマンガ・SSから

・ハムの人✓(多分

・プロット無し、行き当たりばったり

・オリキャラ少々

・作者ギャグセンス皆無

・ケータイ投稿につき、文章短くて早いor長めで遅い更新

・道士出番無し

～お願い等～

- ・誤字脱字は御一報ください
- ・誹謗・中傷は何も生み出しません
- ・文章中において、特定の人物ほか、貶めるような意図はありません
- ・アドバイスなど頂けると泣いて喜びます
- （New!）・更新時は活動報告にて「更新」または「更新予定」のタイトルでお知らせします
- ・以下、追加項目が見つかり次第随時追加します

白龍翔天 修正点

三点リーダーの個数を1↓2個へと修正

作者の趣味で「――」は三個または六個にしています。ミスではありませのであしからず。

呼び名を姓、字で表記 例) 田豫↓田国譲

真名が存在するため名に重きを置かず、初対面の人は姓名で呼ぶ親密になれば字、真名と昇格していく

加筆・修正

余計な説明(石鹼など)省略

タイトル変更(第10話石鹼作り↓疫病対策)

ひとまとめの会話文については改行はするが間は空けず表記

漢字その他表記を統一

ホウ統↓鳳統(本来は「まだれ」+「龍」

程イク↓程旻(「日」の下に「立」

荀イク↓或(本来ははらいの本数が1(2?)本多い

シ水関↓泗水関

「次に文字がつながる際に感嘆符「!?!」の後ろに二マス空白を追加・修正(文末では空けない

改行後に二マス空白を追加修正

「ゝどの」↓「ゝ殿」に変更、統一

主人公一人称「オレ」はカタカナ。漢字の場合は変換ミスです。

数字は基本的に漢用数字表記。一刀は算用数字表記となります。

以下、項目が見つかり次第随時追加します。

本文中で上記の通りになっていない箇所がありましたらご報告いただけるとありがたいです。

一人ではどうしても見落としができてしまいますので……

第1話 天の御遣い

「……………おい」
「ん……………」

誰かがオレを揺さぶっている。もう朝なんだろうか……………確かに身体が光を感じている。

「おい、大丈夫か？」

心配そうな女性の声……………女性？

瞬間、意識が覚醒した。

「え……………」

見れば周りには女性が2人。ええとあの……………コスプレ？

「えっと……………どなたでしょうか？」

「人に名を尋ねる時にはまず自分から名を言うのが礼儀ではないですか？」

手に槍を持った方が言う。うん、その通りだな。

「あ……………そうですね。オレは北郷一刀と言います。改めて、そちらは？」

「私は公孫白珪。幽州の太守をしている者だ」

「某は趙子龍と言う。今は白珪殿の所で客将をしている」

……あり得ない名前と地名——いや聞いたことは有るんだが——
——を聞いた気がする。

「……常山の、趙子龍さんですか？」

「ほう？ 某も有名になったものだ……と言いたいところだが、
その尋ね方からするとそう言うわけでもなさそうだ」

彼女の目が訝しげに、オレを見定めるようにスツと細められた。

「合ってるのか……。今って後漢の時代ですか？」

「それくらいは常識だと思うが……噂の人物ならそれも致し方無
かるう」

白珪さんと目を合わせ、頷きあう子龍さん。

「噂？」

なんだろう。不安と期待が入り混じる。

「又聞きだから簡単にだが、天からの遣いがこの乱世に救済の手
を差しのべる……とな」

まあ、と彼女は一拍置いて続ける。

「ここで問答を続けるのも、な。伯珪殿、城へ戻りませんか？」
「やっとともに喋れる……ふふふ……うん、では話は城でゆっ
くり聞こうか。じゃあ馬に、っと、2頭しかいないし後ろに乗って
もらうか」

なんだろう、背後から暗いオーラが……気にしない方向でいこう。
うん、それがいい。

あ、馬だ。しかも片方は白馬だよ、白馬！ 彼女らに気を取られて全く気付かなかったけど……うゝむ美しい。

「私の後ろに乗れ」

ええと、どこに手を置くべきか。とりあえず腰を掴んでおこう。

「ひゃっ……こ、こらどこを掴んでる！」

「え、落ちないように腰を掴むべきだと思ったんですが……駄目でした？」

「いや、腰を掴むのはいいんだが、もう少し下を掴んでくれ！」

「あ、ごめんなさい」

城での問答でわかったこと。ここはオレの世界で言う三国志の世界であり、武将が女性になっているということだった。全員かはわからないが。

考えられるのはタイムスリップかパラレルワールドだが、武将が女性なんだから後者か。

「ふむ、家で寝て起きたらあの場にいたと」

「そうですね、しかもスウェット……寝間着に着替えたのにこの服になってましたし」

スウェットと寝間着はイコールじゃないんだけどまあいいだろう。

しかし、我ながら冷静だな。もう少し取り乱してもいい気もするんだけど……実感が湧かないからかも。

「私たちは噂には半信半疑だったんだがな、突然空が暗くなつて光に包まれた何かが落ちてきたから急いで向かったんだ」

「そうだったんですか……ありがとうございます」

「いや礼なんていいさ。こっちも考えがあつてのことだし」

考えがなければ興味は示さなかった。そして今巷で噂されるのは『天の御遣い』という存在で、民の希望の星。

そこから導き出される答えは……

「考え、ですか……『天の御遣い』の名を使って民の支持を得、加えて兵も集まる。つてとこですかね」

「ほう。なかなか鋭い御仁ですな」

「少し考えればわかりますよ。苦しむ民には希望となる存在が必要ですから」

うる覚えだが、中国では皇帝が神とイコール、もしくはニアイコールだったはず。それなのに「『天』の御遣い」などという言葉が持て囃されるのだから、王朝の力が衰退し民の信頼を失っているのだらう。聞いた話では黄巾賊が各地で暴れまわっているらしいし。

「確かにな。しかし……さっきの話に戻るが未だに信じられないな。1800年後の未来で私たちはすっかり有名人の『男性』だということを」

「そうです。特に子龍さんは常山の昇り龍、後に西方の益州を中心に建国される蜀という国では五虎大将——つまり国内最強の五

武将ということですね——の1人として名を馳せますから」

「常山の昇り龍か、良い二つ名を聞いたな。今後はそう名乗ることでしょう」

「気に入って貰えて嬉しいです。それで今後のことなんですが…

…」

これからどのように扱われるか、それを聞こうとした時白珪さんに止められる。

「待った北郷、私は私は!？」

言っていていいんだろうか。……いいか。うんいいな。

「最初の方に袁紹によって滅ぼされます」

あ、落ち込んだ。

「伯珪殿、それもまた運命ですぞ」

確かにそうなのかも知れない。

「でも……あくまでそれはオレの知っている未来でしかない。オレがこの世界に来た理由……きつとそれはその未来を変えるため。歴史に添って生きるなら、ここに来た意味が無いですよね」

そう、オレがここに来たのにはきつと意味があるはず。当面の目標はそれを理解すること。

「ですから元気だしてください、白珪さん。あのままだったら野垂れ死んでたり盗賊に襲われたかもしれないこの命を救って貰った恩

義、それに報いたいんです」

だから、

「貴女の元で。知識も身体も総動員して貴女を支えていきましょう。そして……民が安心して日々を送ることの出来る平和な世を」

「北郷……」

「訳も分らずこの地に飛ばされた『天の御遣い』が、この地の民のためになりたい、と。北郷殿……いえ、我が主よ。某が貴方の刃となり『みち』を切り開いて行きましようぞ」

「っ！ 子龍さん……ありがとう」

「星、と呼んでください。真名と言って信を置ける者にのみ預けるもの。許しなく真名を呼ぶは殺されても文句は言えない、それほど神聖な名です」

真名……真の名、か。現代では諱、つまり忌み名に相当するものだろう。この時代には名とは忌み名であるため他人に呼ばせるものではなかった。しかし、それと同じかそれ以上に神聖なものなのかもしれない。

「……私の真名は白蓮だ。これからよろしくな、北郷」

「一刀、でいいですよ。オレのいた世界には真名という風習はありません。ですから姓は北郷、名は一刀です」

しいて言うならば一刀は真名にあたるのだろうか。親しくない人に名前を呼ばれたら不快な思いをするし。

「なら私に敬語はいらないぞ、一刀。堅苦しいのは苦手なんだよ」

照れくさそうに白蓮が笑う。

「ん……わかったよ白蓮。それと星は白蓮じゃなくてオレを主と言ったけど、それでいいの？」

「ええ。我が主と定めるは貴方様だけ。何でもお申し付けください。——もちろん夜伽も構いませんぞ？」

ふふ、と妖艶に微笑む星はすごく魅力的だった。

「は、はは……とりあえず一刀、文字の読み書きは？」

「言葉が通じるから大丈夫そうだけど……一応試しておいたほうがいいかな？」

当然漢文、それも白文だろうし。返り点がほしいなあ……

「ん、ならちよつと待ってろ」

読めなきゃ……勉強かなあ。

「読めなかった……」

義務教育に高校と11年学んできただけあって多少の文法はわかる。

けど単語の意味が広かったり、意味は簡単なのに漢字が難しくてわからなかったりと散々だった。

「星には調練があるから読み書きが出来る侍女、もしくは文官でも付けるよ。うちは人手不足だから侍女にいてくれると助かるんだけどなあ……と、一刀が早く戦力になってくれればもっとありがたいかな」

そんなに足りないのか……早く政務が出来るようになろう。そして現代知識を生かして有能な文官も探そう！

遠い目をする白蓮を見て、そう、思った。

第2話 新たな出会い（前書き）

『天の御遣い』北郷一刀。

彼は約1800年前の中国にやって来て、2人の人物、公孫賛と趙雲に出会うのだが…なんと2人とも女性であったのだ。

内心驚愕しつつも自らの使命を感じ、公孫賛陣営に参加することを決めた一刀。

これから彼の人生はどうなっていくのだろうか…

第2話 新たな出会い

『天の御遣い』北郷一刀を拾ってから早1週間。

読み書きを教えている侍女曰く、飲み込みがとても早いとのこと。

そろそろ簡単な政務くらいは任せていい頃合いだろう。

さて、どこにいるのやら……？

おっ、あれは……

「星、一刀を見掛けなかったか？」

「おや白蓮殿。主なら先程から訓練用の剣で素振りをしていましたぞ」

「素振り？　なんでまた」

「なんでも自分の身くらいは自分で守れるようになりたいと」

うーん……確かにいつも本陣が安全だとは限らないし、陣頭で指揮する方が兵士たちにも良いだろうけど。

「某に余計な心配をさせずに、思う存分力を発揮してほしいとの意味合いも含まれているようですね」

星は貴重な戦力だ、前線で戦ってもらわなくてはならない。

そして『天の御遣い』としての責任感と言ったところだろうか。

「わかった、ありがとう」

「ふう……」

素振りを終えて一息つく。時々星に相手して貰うのだが、全く齒が立たない。というか軽くあしらわれ続ける。

名だたる武將に勝てるとは思わないものの、それでも一撃くらい与えたいというのは剣に心得のある者としての性だろうか。

女性が強い世界だから、恐らく男性一般兵に勝てれば良いところ。実戦経験のないオレにはそれすらも厳しいが。あ、目からも汗が……クスン。

「一刀」

「おあつ……白蓮か。どうしたの？」

「ん？ 変なやつだな……今に始まったことじゃないけど」

それ地味にキズつくんだけど。

「わ、悪かった、だから地面に『の』を書き始めるなっ!？」

まあいいや。

「で、何？」

「変わり身速っ！ いや、今後は少しずつ政務をやってもらおう
と思ってな」

「うーん、いいけど……教えてくれよ？」

「ああ大丈夫だ。文官を1人つけるから、覚えながらで構わない」
文官は皆おカタイ……と思うのは偏見だろうか。

「いつからやればいいの？」

「明日からだ。頼んだぞ？ あ、あと何かしら要望とかがあったらどんどん伝えてくれ。天の知識を生かした政策とかな」

「わかった。白蓮もあんまり根を詰めすぎるなよ？」

「そうできるといいんだがな……じゃ、またな」

白蓮と星に出会った時は名前に驚いて声も出なかったが……また有名な人なら今度は奇声を発するかもしれない。

心構えだけはしておこう。

翌日。

奇声は出なかった。けど……また女性なのか、やっぱり。

「そんなに見つめられて、私がどうかしましたか？ ま、まさか二人きりだからといってそんな……いやん」

両頬に手をあて、ふるふると首を横に動かす。

「やるならそれらしく照れてください、お願いします」

基本的に無表情で、さっきのセリフもそうだった。

それと教えてくれるのは田豫「でんよ」さん。確か初期に劉備に仕えた人じゃなかったかな。肉親の病とか何とかで去ったと記憶している。

「そうじゃなくてですね、え〜と……政務って肩が凝るなあと思いますして」

「慣れればそうでもないと思いますが……そのうち慣れますよ」

そんなものか。ま、これで白蓮の仕事が減るならと思って頑張ろう。

さてさて、残り少しスパートをかけようか。

政務が終わり息抜きの散歩……ではなく、見回りの仕事つまり視察。

警邏はオレ提案の警備隊が行っているので、実際は街の市場で活気を見たり、民の声を聞いたり。そこから見えてくる政策もある。

最初は護衛のせいで怖がられていたが、今ではすっかり打ち解けている。

「あーみつかいさまだー！」

「こら、他人を指差しちゃいけませんっ。こんにちはは御遣い様。毎日お疲れ様です」

「こんにちは。お元気そうで何よりです。何か困ってることがあったらいつでも言っして下さいね」

「はい、見回り頑張っして下さいね。失礼します」

「ありがとうございます。お氣をつけて」

相変わらず綺麗な人だな……笑顔にドキツとしてしまった。

5歳くらいの子どもを連れているから少なくとも20歳は越えているだろうか。いや、でも昔の日本で15歳で元服だったし……20歳ちようどかあり得るな。

いかんいかん呆けてる場合じゃない。続き続きと。

見回りを終えて城へ戻ったオレに伝えられたのは危急の報。

「……黄巾賊が？」

「ああ、西の外れの邑が襲われているらしい。数は約二百。五百もいれば大丈夫だろうから、早馬で討伐に向かってくれるか？」

くそつ。死人が出ていなければいいが……

それが希望的観測であることがわかっていても、そう思わずにはいられない。

「……わかった。指揮官はオレ1人？」

「星が暇そうにしていたから連れて行ってやれ」

「了解。よし、すぐに向かうよ」

「酷いな……」

立ち上る黒煙と激しく燃え盛る炎。

血が染み込んだ地面、無造作に転がる死体、鼻をつく異臭。

1つ1つが賊の襲撃を如実に物語っている。

「これが現実です。漢王朝の力は衰退し、州牧や県令たちが私腹を肥やすために課した苛税に苦しむ民が、黄巾となって他の邑を襲う……そして襲われた邑の人々は困窮し、他の邑を襲う……この悪循環を解決するのが我々上に立つものの使命です」

白蓮殿は良い人物ですな、と星は洩らす。

「……斥候を出して賊の居所を特定する。残りは生存者を探して介抱を頼む」

許せない。賊も、自分の無力さも……

確かに星の言う通り黄巾賊は困窮した農民が主体だろう、しかしだからといって人々を殺して略奪を働くのを許されるわけではない。

「隊長！」

「どうした、賊の住処が見つかったのか！」

「いえ、それはまだです！ が……生存者を発見し、隊長にお会いしたいと！ こちらです！」

生存者がいたか。

「星、ここは頼んだぞ」

「御意」

いたのは3人の女の子。3人とも満身創痍であるが、命に関わる傷はなさそうだ。

1人が歩み出てくる。

「貴方がこの隊の長でしょうか」

「ああ、オレが隊長の……」

名を言おうとしたところを、彼女の後ろの2人によって遮られた。

「ちよつ、真桜ちゃんやめるのー！」

「放さんかい沙和！ これだけは言わんと気がすまんのやつ！

……ホンマにあんたが隊長なんやな？」

鋭い眼差しで睨まれる。咄嗟に目を逸らしたくなる。だけど、逃げるわけにはいかない。

「……ああ、そうだ」

「遅いんや……来るのが遅いんやアンタらつ。ここの人たちはええ人やった……余所者のウチらでもあたたかく迎え入れてくれた……笑顔で世話をしてくれた……そんな人たちが目の前で死んでいく姿を見た、ウチらの気持ちかわかるかあつ！！」

真情の吐露。それに対してオレは反論する術を持たない。例え持っていたとしても、反論することは無かっただろう。彼女のその眼の端に、光るものを見てしまったから。

「お、おい真……いや曼成っ！」

「キサマっ……！」

激昂する兵士を抑え、前に進み出る。

「他に、言いたいことは」

「まだまだあるけど……いつまた賊が来るかもわからない状況や、今はこれでええわ」

「そうか。……救援が遅れたこと、その結果民の命を散らしてしまったこと。許してくれとは言わない……本当に済まなかった」

言い、頭を下げる。

「なっ……！」

「なっ……！」

頭を下げる目の前の男を、私たちは絶句して見つめるしかなかった。

民のために兵を向け、暴言として斬り捨てて構わないような八つ当たりに近い真桜の言葉を受け入れ、認め、あまつさえ頭を下げる。そんな誠実な態度。

（信じられない……）

この気持ちはきっと、真桜や沙和も同じだったはずだ。

それと同時に確信を得た。

この人のような……いや、この人こそがこれからの世には必要であり、必ずこの乱世を終焉に導く方だと。

そして、我々が自らの力を捧ぐべき人物である、と。

「真桜」

「……ああ、わかつとる。すまんかった、兄さん。このとおりや」「いや、そっちが頭を下げる必要はないよ。悪いのはこっちなんだから……」

「そんなことないの。助けに来てもらえること自体ありがたいの」

「その通りです。あなたたちは我々を助けに来て下さいました。……これから黄巾賊の討伐に行くのでしたら、是非同行させていただけませんか」

「……君たちは満身創痍だろう」

返り血と出血、どっちがどっかわからない程彼女らの服は朱に染められていた。

しかし、この悲惨な光景を生み出した黄巾賊に一矢を報いたいと思うのは当然であり、その権利がある。

だからこそ。

「……命を大切にしてくれ。人数で勝っているけど、無理をしないでくれ。その条件が呑めるならば連れていく」

「っ、呑めます」

「ならいいだろう。賊の居所が発見されしだい出陣する。それまでは手当てを受けて休んでいてくれ」

「はい、ありがとうございます……と、話の途中で名前を聞き損ねていましたね」

「幽州の北郷一刀だ。よろしくね」

「っ！ 貴方があの……私は楽文謙と申します」「李曼成や」「于文則なの」

魏を支えた武将たちか。女性だがいい加減驚かなくなってきた。

彼女らの力はこれからきつと民の助けになるだろう。

数に利のあるオレたちの敵ではなく、黄巾賊の殲滅は終わった。

そして民を埋め、賊を埋め、今はその墓の前にいる。

「心温かい民たちよ。貴方たちの優しさは、きつと彼女らに伝わった」

村人たちの墓穴を作る際、彼女らが流した涙が何よりの証拠。

「この犠牲は絶対に無駄にしない。あなたたちの死は、この大陸に平和をもたらすための礎となるっ」

剣先で手をなぞり、血が墓へと垂れ落ちる。

「血は万物の“生”の連なり。今生で死別しようとも、貴方たちは我々の心の中で永遠に生き続ける。……安らかに眠ってくれ」

簡単な葬儀を終え、帰り支度も終わったころ。

「北郷様！ 我々を連れていって下さいませんか」

「……星、彼女らの力量はどうだったかな」

「申し分無し、とはまだ言えませんが磨けばまだまだ光るものがありますな」

その評価について、オレも——他人を評価するような力量はオレにはまだ無いが——同意見だった。

「そっか。だそうだよ。うちの筆頭武将のお墨付きだ」

「と言うことは……」

「これからよろしくね」

「はいっ！ 今後は凧と及び下さい、隊長！」

「ウチの真名は真桜や。よろしゅうな、たいちよ」

「沙和は沙和なの。よろしくお願いしますなの！」

「うん……凧、真桜、沙和。改めてよろしく」

こうしてつらい経験と共に新たな仲間を加え、白蓮のもとへ戻るのであった。

第3話 軍師加入フラゲ（前書き）

楽進：凧、李典：真桜、于禁：沙和を新たに陣営に迎えた一刀。

自分ではなく一刀の部下——しかも女の子——が増えたことに人知れず落ち込む白蓮。

そうとは知らず一刀は内政に励むのである…

序盤は内政につき読み飛ばし可

第3話 軍師加入フラゲ

黄巾賊討伐から2日経ち、オレと星、三羽烏——風・真桜・沙和——は白蓮の私室に集まっていた。

白蓮が言うには、

「古参の将たちが我々新参者への待遇に対する不満を持っている。だから何かしら貢献をして認めさせて欲しい」

とのこと。

星はここで武勲を挙げているが、白蓮では無くオレ直属の部下——尤もオレとしては部下では無く仲間だと思っている——であると公言している。

そしてオレは『天の御遣い』という自分でも胡散臭いと思う肩書きで拾われて来た人間だ。

風たちに関しても、実際に戦闘を見ていない奴等に彼女らの力量がわかるはずも無く、さらにオレが連れてきたと言うところにも反発する者がいるんだろう。

しかし今は黄巾も幽州ではだが大きな動きは無く、烏桓や匈奴、扶余も静かにしているらしいから、暫く戦も無さそうで出番がない。

あつたとしても小規模の黄巾賊の反乱くらいだろう。

喜ばしいことなだけども。

そうなることやめることは内政面……農商工業の発展や治安の維持・向上などに限られてくる。

この時代で貴重なのは塩。専売権もあるのだが違法に、高値で取引されることも少なくない。

民衆に適正価格で行き渡らせることを目標にするなら狙うは塩か……

幸いにしてここ幽州は海に面している。

加えて後に天津となる場所あたりの沿岸では干満の差が激しく、中国大陸有数な塩田も生まれたはずだ。他にも天然ガスや油田なども確か存在したはずなので、毎日温かいお風呂に入れるかも知れない。

さらに農薬用肥料の開発をしようとも思う。糞尿や、干鰯、粕なども量産できるだろう。

漁村では捨てられるであろうものを肥料として買い取ることを約束し、代わりに……というわけではないが塩を精製できる土地を借りる。

そうすればオレたちは塩の収入を得られ、漁村民も利益を得られる。ギブアンドテイクというやつだ。

商業に関しては治安を向上させれば自ずと商人同士のネットワークによって情報も広まり、各地からこぞって幽州にくるようになる

はず。

工業においては真桜の加入によって大きな転換点を迎えた。オレのうる覚えな知識をも形にするのだから彼女の技術力は計り知れない。

灌漑用の水路や溜め池、農作業の効率が上昇する用具——千齒扱・踏車・千石通し・唐箕・備中鍬・e t c——に鎧など……

成功の暁にはきつと国は富み、栄え、強兵を生み出す。

そして今後互いに勢力を伸ばして隣接する袁紹や曹操にも対抗出来る上、北方民族との交易も期待できるようになる。

なにはともあれ……優先順位は塩。お金がなけりや何も出来ないからな。

鎧くらいは何かなるだろうから、それだけは白蓮と真桜に話を付けておくか……

黄巾賊を討伐したりしながら、数ヶ月後。

オレは1人頭を抱えていた。

「やべえ……どうしよう」

結果から言おう。

農業は発達し街は連日の賑わいを見せている。商業においてはなかでも塩は余りあるほどで、侠客と呼ばれる人々を通しかなりの量を他国に売った。美髯公関羽も侠客だったらしいから、いつか会えるかも。それでもまだ沢山ある塩を味噌の製造——塩が材料だとわからなければ専売権も何も関係あるまい——に使った結果、試行錯誤の末完成し、富裕層に大ウケ。そのお金で鎧も量産し、農具を作り、さらに農業が改良され……

つまり大成功！

なにこの素晴らしいスパイラル。

現代日本では考えられないほどの好景気と歳入である。

白蓮の白馬義従も兵数が倍近くなり、兵士の装備や星たちの武器も新調または改良した。

オレの登場（登場？）から半年で、恐らく袁家にも負けないほどの資産を手に入れることとなったのであった。

ついでに、久々に味わった味噌汁はとても美味しかったです。

陳留を目指す2人の少女がいた。片方の名を程立、真名を風。もう片方は——今は戯志才と名乗っているが——郭嘉、真名を稟と言っ。

彼女らは陳留をもつ目と鼻の先という位置にまで捉えている。

そのため暫しの自由行動時間ということで、宝慧（ ）という名の人形を頭に乗せた少女、風は、街一番の書店に来ていた。

「ふむふむ……どれも既読の物ばかりですねー」

「おつ。お嬢ちゃん、ウチの蔵書量で物足りないってか。ならちよつと待つてろ……ええとどこに仕舞ったか……あつた！ ほらよ」

渡されたのは『天界語辞典・ばーじょんわん』と書いてある本。

実は一刀が時々言う耳慣れぬ言葉を聞いた田豫がそれを詳しく聞き出して記憶し、本に纏めたのだ。恐ろしい記憶力である。

当然一刀はこのことを知らないが、作者名はしつかり『北郷一刀』・『田国譲』となっているのであった。

「えと……これは」

「何でもそれは幽州に落ちたっていう『天の御遣い』が書いたやつでな、売りもののほうは売り切れちゃったが……オレも読もうと思つて取つておいたんだよ」

「……お気持ちはありがたいのですが、おじさんの物なら受け取れないですよー」

「気にすんなつて！ うちはその本のおかげで随分儲かつたし、またすぐに入荷するさ。それに嬢ちゃんみたいな本好きに読まれた方が本もありがたいってさあ！」

なんとも気前の良いオヤジである。

（これで断るのは些か気が引けるのです。ここは好意に甘えておきましょう）

「……ではありがたく頂戴いたしますのでー」
「おう！　じゃ、また来てくれよなっ！」

風は店を後にし、稟との待ち合わせ場所に本を読みながら戻るのがあった。

「稟ちゃん稟ちゃん、風はこれから行きたいところが出来たのですよー」

「……風、陳留まであと少しというところでいきなり何を言い出すの？」

いえいえ、と風は首を横にふる。

「稟ちゃんはこのまま曹操さまのもとを訪ねて構わないのです。行くのは風だけです」

「幽州……確かに最近治安も良いと聞くけど、道中危険が全く無いと言っわけではないのよ？」

そうして2人はにらみ合う。が、少しして。

「……はあ。わかったわ。風が一度そう言い出したら意見は変わらないのはもう身に染みた。だからここでお別れ……の前に護衛の当てだけはちゃんとつけなさい」

「その点については問題無いのですよー。帰り際に見つけた、幽州へ向かう旅人みたいな人と話をつけておきました」

「つまり反対されても行くわけだったと。全く……」

間をおいて稟は再び話しかける。

「……もし戦場で会ったのなら容赦はしないわよ？」

「望むところなのですよー？ 稟ちゃんを打ち負かして曹操さまのお仕置きに追い込んでやるのです」

「そそそ曹操さまのおおおお仕置き…ぷはっ」

「あらら……はい稟ちゃん、トントンしましゅうねー」

（稟ちゃんの鼻血を止めるツボを知っている人がいればいいのですが。いえ、ここはそのツボを紙に記して懐に入れておきましょう。紙は高価ですが稟ちゃんの命の方が大事ですし）

やがて稟は鼻血を止め、2人は握手を交わす。

「達者で、風」

「そちらこそ。ではまたどこかで」

最後まで飄々としたままで去って行く風であった。

さてと……あ、いましたいました。

武に心得のあつて尚且つ幽州を目指す人たちがいて良かったのです。

「お待たせしました」

頼んだ側が遅れてしまって申し訳ない気持ちでいっぱいなのですよー。

「程立さん、もういいの？」

「ええ。では行きましょうか——劉備さん、関羽さん、張飛ちゃん」

「ふむふむ……幽州の太守さんとは同学の仲で……つまり大志はあるがお金も装備も無いから雇ってくれ。と、いうことですねー？」

「あはは……そんなにはつきりと言わなくても……」

風に痛いところを突かれた桃香——劉備の真名——は顔が若干引き攣っていた。

「と、ところで程立さん！ 今軍師を探しているんだけど……軍師として曹操さんのところに行くつもりだったんでしょ？ うちで働く気はないかなっ」

「風としては『天の御遣い』がどのような人か気になるので遠慮させてもらうのですよー」

——風は現実と理想の区別をつけられない人に仕える気はさらさら無いのです。それに……噂の『大徳』が本当ならいずれ良い軍師が見つかるでしょうし。

「御遣いさまかぁ……どんな人なんだろ。幽州も御遣いさまが来てから活気付いたって聞くし……」

「百聞は一見に如かず、ですよー？」

と、そこで桃香の義妹である愛紗こと関羽が話し掛けてくる。

「桃香さま、あちらから何者かが向かってきますのでご用心を…
あれは賊、でしょうか。鈴々っ！」
「応っ、なのだー！」

—— ふん、賊など一蹴してくれ…… え？

意気込んだ愛紗だったが。

「ひええーっ！ もうあの村にや行かねえ！？」「」「逃げろー
！」「」

「……えーと？」

「にやはは、愛紗の顔が怖くて逃げちゃったのだ」

「鈴々っ！？ …… そんないやまさか、でも。そんなに私の顔は
怖いか……？」

何事かをブツブツ呟いている愛紗を横目に風はしっかりと前を見
据えていた。

—— 賊さんの様子からすると村人に追い払われたようですね…
…しかし村人単独で戦うなんて危なすぎますし…… おおっ、これは
まさに劉備軍軍師出現ふらぐというやつでしょうか？

「とりあえず行ってみようよ！」

「そ、そうですね。それが良いでしょう」

「わ、私を軍師にしてくだしゃいっ！ はわっ！？ また囁んじ
やったよう……」

「しゅ、朱里ちゃん頑張って！ ごおるはもうすぐそこだよ！」

——「ごおる……ああ、達成目標のことですか。むむむ、この子たちも『天界語辞典・ばーじょんわん』を読んでいるとは……」

「えーと……とりあえず軍師になりたいんだよねっ、ねっ!？」

「は、はいっ、お願いします!」

「ね、良いよねっ、愛紗ちゃん!」

「ええ……ほぼ同数の農民で盗賊を破ったのですからむしろこちらから頼んでも良いくらいです」

「や、やったよ雛里ちゃん!」「おめでとう朱里ちゃん!」

「土元どのは一緒に参らないのかな?」

「はい、私は公孫賛さん……というより北郷さんの元へ行きたいんでしゅっ。あわっ」

——よく噛むのは『属性』付け……というやつでしょうか。軍師として『らいばる』が出来てしまいましたが……切磋琢磨するのもいいかもしれないのです。

「そうときまれば早く北郷さんのところに行かないとね」

残念なことに白蓮ではなく一刀の認識が強い幽州である。

「——はっ!？ 今何か不名誉なことを言われた気がした……」

「太守様、そんなことより政務を進めてください」

そんなことって……そろそろ泣きそう。

第4話 キズナツナイデ（前書き）

曹操に仕えんと陳留を目指していた稟と風。陳留まであと少しというところで風は一刀に興味がわく。

幽州へと向かう一行、桃香・愛紗・鈴々と出会い、旅をともにすること。

幽州への旅路の途中で桃香は諸葛亮・朱里を軍師として迎え入れる。が、もう1人の少女、鳳統・雛里は一刀に興味があるという。

風は『らいばる』心を燃やし、一刀の回りの女性環境は変化を見せるのだった――

第4話 キズナツナイデ

「はあ……」

思わず溜め息が出るのは仕方ないだろう。

今、一刀のおかげでうちの収入源は確保され、かつてない程国庫は潤っている。

最初は知り合いの侠客——弱きを助け強気をくじく人々——に頼んで塩の密売を行っていた。勿論適正価格以下の値段で、だ。

それに一刀が『味噌』とやらを作ったために、今はそちらの製造にも力をいれている。買うのは富裕層であり、そのため金額を上乘せているのだが……それでも連日売り切れの大人気。

製造方法を明かしていないため、原料に塩が使われていることを証明出来ず、塩の専売権に関わらず堂々と売り出すことが出来る。まあこじつけられたら手も足もでない……かもしれない。

いや本題はそれでは無くて。

善政は名声を高める。もともと『天の御遣い』として有名だった一刀がさらに有名になるわけである。一刀が、だ。大事なことから2回言った。

そう、『天の御遣い』が国を奪う……そんなことを考えている一部の文官たちはどうでもいい。私は一刀を信じているからな。

問題は、だ。一刀の名声が高まる。有能な人物が『一刀』を訪ねてくるっていうことだっつ！

先日旧友である桃香が部下を連れてやってきたのだが……

2人も軍師志望。……一刀の。

うちには軍師という軍師はいなかったから、喜ばしいことだ。

それに私から見ても2人とも可愛らしい。星然り凧・真桜・沙和然りで、国譲も一刀のことを気に入っているみたいだ。

なんか今胸のあたりにチクツとした痛みが走ったと思ったが……うん、気のせいだろう。

「大丈夫ですか、太守さま」

「ん、ああ……気にするな、国譲」

はあ……

今日は政務が早く終わり、視察がてら散歩でもしようかと考えていた矢先だった。

「白蓮、政務終わった？」

「あ、ああ……どうした？何かあったのか」

「いや、暇ならデートしない？」

「でえと？言葉の響きは覚えてるんだが……ええと確か、合い

挽き？ 何を挽くんだ？」

うる覚えだから言い方がこうなってしまうがそれはまあしょうがない。

「白蓮それ字が違う……人目を忍ぶ訳じゃ無いけど2人で街に出掛けようって話だよ」

「ああ逢い引き……って逢い引き!？」

「うん。で、どうするの？」

「ええと……あの、いや、そのだな」

「もしかしてオレと2人きりは嫌だった？ はは……」

「っ！ そんなこと無いぞ！」

声が大きくなってしまった。知らず知らずのうちに興奮してしまっていたらしい。

「それなら良かった。一刻後にここでいいかな」

<みつしよん・その1>

く買い物編く

どうも、みんなのあいどる風ちゃんですー。

今日はお兄さんが白蓮さんとでえとをするそうなので、細かい仕事をしている最中の田豫さんに経過と結果を報告するために監視……もとい見守ってます。

はてさて、お兄さんの女の子に対する扱い方はどれ程のものなのでしょう？

期待させて貰いましょう。

おっと……動き出しました。

2人で街へ向かいます。護衛の兵隊さんたちはいません。

いざとなったらこっそり護衛しているせ……華蝶仮面さんが助けてくれるので安心ですよー？

「それで一刀、何処か行く当てがあるのか？」

「現代なら……ああオレのいた時代なら公園とか遊園地とかなんだろうけど……あ、ならウィンドウショッピングにしようか」

「言ってることがわからん」

「あ、ごめんごめん。主に店を冷やかしたり、買い物したりってことだよ」

「天の言葉は難しいな……」

「慣れると楽なんだけどね。お、小物屋……ちょっと入ってみるか」

これでは中の様子がわかりませんから、風も変装——華蝶仮面なんばー2——をしてお店に入ります。

「うお……やっぱり沢山種類があるなあ」

せっかくですから風も物色しておきましょうか。

「あ、これ可愛いな……」

白蓮さんがねつくれすを見つめています。

地味過ぎず、華美過ぎず。しかし素朴な味わいのある……そんな印象を受けます。白蓮さんらしいとだけ言っておきましょう。

あ、お姉さんこれとこれ……とそれ。あれも下さい。

代金はお兄さん——『天の御遣い』のツケでお願いします。

ふふふ、お兄さんが視察という名の散歩に行く度についていく風は、既に代金をお兄さんにツケてもらうことができるくらい顔が広いのですよー？

あ、2人とも何も買わずに出てきました。

風も慌てて後を追います——　　と思ったらお兄さんだけ戻って来ましたが……はて？

先ほど白蓮さんが見てたねつくれすを持って……ああ、そういうことですか。お兄さんもなかなかやりますねー。

欲しいと思っていたぶれぜんとを貰って喜ばない女性はいないのです。しかもそれが意中の男性からなら尚更のこと。

ただ、白蓮さんはお兄さんへの好意を自覚していなさそうな気がします……

それは本人の問題ですし、らいばるをわざわざ増やすほど風は優しくないのですー。

それはさておき、お兄さんを追いかけます。

「女性といったらやっぱり……服だる服。うんうん」

次は服屋さんに向かうようですが……

「メイド服、バニースーツ、スク水にセーラー服！ キタコレっ
！！」

お兄さんがいっなくなき積極的なのが謎なのですよー……？

「バニー……は星だな。尻は犬耳、いや耳だけじゃなく尻尾も付けるか。沙和は……ボンテージ姿で調練させてみようか。真桜は水着みたいな服装だから新調してあげようか。ビキニかな？ 国譲さんのエプロン姿とか見てみたいなあ。かなり似合いそうだ……あ、ならメイド服でも？ ナース服でもよさそうだ。国譲さんの似合う服の範囲は広いなあ。問題は風と雛里のどちらにスク水を、どちらに幼稚園児服＋ランドセルを着せるか、だ。異論は断じて認めん。白蓮は……うん、セーラー？」

「おっ、おい一刀……？」

「あー妄想が止まん！ よし、早く行くぞ白蓮！！」

「え？ ちよっ、まっ……うわあああ！？」

白蓮さんが為す術も無く引き摺られていきます。

「——おっちゃん……オレがこれから提示するもの……作れるか？ 金に糸目はつけない。これなんだけど」

「うん？ こっ……これはっ！」

「出来るかな」

「出来ますとも！ いやむしろやらせてくだせえ！ それに代金もいりやせんぜ！ この絵のおかげで創作意欲が湧いてきやしたっ」
「そうか……任せたぞ、おっちゃん」
「ええ、勿論！」

ガシツ、と堅い握手を交わした後、抱き合って互いの肩を叩き合う2人。……雛里ちゃんと孔明ちゃんが喜びそうな構図ですね！。

話も纏まり、お兄さんは白蓮さんのもとへ。

「一刀、これなんかどうかな」

「おお！ 何を着ても着こなせるなあ白蓮は」

「それは私が普通だという……」

「違う違う！ 普通に……じゃ無くてちゃんと似合ってる、ってこと。ってか逆にどんな服でも似合うって凄いよね」

「それもそうだな」

着ている服から受ける印象というものがありますが、白蓮さんの場合はより強くその印象を引き立てると言いますか服に着られてると言いますか……

いえあまり触れないでおきましょう。

さて服も買い終え、次は昼食のようです。

<みつしよん・その2>

〈食事編〉

気付けばもう既に昼食時。道理でお腹も空くはずです。

……風は別に飴だけで生きている訳ではありませんよー？

「富裕層がお金を使えば巡りが良くなるってね」

おおっ、高級料理店ですねー。

「か、一刀、私でもこんな店入ったこと無いぞ」

「大丈夫大丈夫、この店主と知り合いだし、個室を予約してあるよ。さ、行こう。こんにちはー」

「あら……御遣いさま。こちらへどうぞ」

こちらの店主は飴作りにも携わっていて、風はお得意様なのです。

この店はお兄さんから大量に味噌を仕入れて新しい料理を続々と開発しているため、お兄さんとはお知り合いなのだそうですよー？

お兄さんにとっても店主さんを良い人であると認識していて、味噌を安く売っているそうです。

戻ってきた店主さんに風の話を話します。

「お2人のご様子……ですか。わかりました」

さて、風もこの時間を利用して星ちゃんと食事して来ましょう。

ふむふむ……つまり2人はイチヤイチャしていたと。

「端的に言えば、ですけどね」

ありがとうございました。

……今後お兄さんへの対応を改める必要がありますねー。

食事の後は散歩のようですが……城から出るのですか。お兄さんは星ちゃんに気付いていたようです。

星ちゃんはいろんな意味で目立ちますから、しょうがないのですよ。

「では星ちゃん、行きましょうか」

「風、何か失礼なことを考えていなかったか？」

「いえいえ、星ちゃんは華蝶仮面だなーと思ひまして」

正直言つて変、という意味ですが。

「む、当たり前だろう。風にもようやく華蝶仮面の良さが伝わったようだな」

褒め言葉ととられたようです。そういうことにしておきましょう。

城を出て向かったのは、河原。森に囲まれ、ひんやりと澄んだ空気が心地良い。

「こんなキレイな場所があつたんだな……」

「街の人に教えてもらつてね」

「民の声、か」

城に、政務室に籠つてるだけではわからないことは沢山ある。

「……なあ白蓮」

「ん？
なんだ？」

「オレは白蓮が好きだよ」

そうか。

「……つてええええええ！？」

「白蓮はオレのいっどいっど思ってる?」

「えっ？
……わっ、私は」

——どうなんだ。一刀は鍛練も頑張ってるし文字を学んで政務を頑張ってくれてるし……いや違う、そんなことを聞いているんじゃない！！

一刀は優しくて格好良くて……鍛練の理由が守られるだけじゃ無くて守りたいからだと星から聞いた時はどこか嬉しかった自分がいた。

そして一刀を慕う女が増えて…… ああ、なんだ。あの時感じた痛みは気のせいなんかじゃなかったんだ。

「うん……わ、私も一刀のことが……すすすすつ、好きだっ」

一刀は白蓮が何か悩んでいることを田豫から聞いていた。ボーっとしてたり、落ち込んだり。

——ボーっとしてる時に考えていたのだろうが、それが口に出ていたようでそれを国譲さんから告げられた時恥ずかしい思いをしたけど、嬉しかった。

「ありがとう。嬉しいよ」

「一刀……んっ！？ んん……ふぁ」

「良かったですな、白蓮殿」

「うん……へっ？」

現れたのは星と風。彼女たちは一部始終をしっかりと目に焼き付けていたようだった。

「せ、星！ それに風も！？ 一刀お……って驚いてない」

「ごめん、知ってた」

「え……」

城にいたはずの星がメンマを見定めているのに一刀は気付いていなかった。

——護衛の兵士をつけてないのだから、星がついているんだろ
う。

そう検討をつけ、城を出ることに決めたのだった。

「まあまあ、白蓮殿も女だということですね。で、主。好きなのは白蓮殿だけなのですか？」

「はは、星も風も……みんな好きだよ」

告白直後にこう言えるところが、一刀が種馬足り得る所以だろう。

「……ま、良しさ。自分の気持ちに気付けたんだから」

「おおっ、白蓮さんが大人の女になってしまったのですよー」

「ははは。それじゃ白蓮、星と風と一緒に戻ろうか」

「風はお先に失礼するのですよー」

「では某は風たちにこのことを話してきましょうか」

そう言い、一刀と白蓮を残して去る2人。

「一刀……」

「これからも皆で頑張っていこう。な？」

「……そうだな！」

2人は笑顔で城に戻るのだった。

城内。

風は田豫の私室にいた。

「……そうですか。わかりました」

「国譲さんも女の顔になりましたねー。ふふっ、風も負けてられないのですよ？」

一刀の知らないところで、彼を慕う女性たちによるアプローチが始まろうとしていた――

第5話 反董卓連合・序章（前書き）

白蓮との仲を深めた一刀。

水面下では女の争いが勃発しているが一刀は気付かない。

しかしそんな日々も長くは続かないのであった…

第5話 反董卓連合・序章

主だった将が集まり、軍議が行われていた。

「……やっと重い腰を上げたか」

思わずそう呟いてしまう。

「対応が遅すぎますな」

星がそう言うのも無理は無い。

中央、つまり漢王朝からの指令。それは、各地に蔓延る黄巾賊を討伐せよ——というものだった。

「名を上げる絶好の機会か……」

「戦いでは無く一刀みたいに善政で名を上げるような世ならいいのに……」

「せやけど大将、仕方ないやろ」

凧・沙和は、オレの部下——と本人は言っている——である星の副官という扱いになるため出席していない。

真桜は攻城兵器その他の成果を報告するため出席している。

「ああ……今私たちがやれることを精一杯やろう」

——なんて話をしていたのは数ヶ月前。

鎧を導入したがまだ秘密兵器としておこうという見解が一致、騎馬兵の中から鎧無しでも馬を扱える選りすぐりの兵と、オレ加入以前——つまり鎧導入前——の白馬義従を率いて出陣。

野戦ではうちの軍の機動力・破壊力に賊如きが敵うはずもなく、粉碎。

攻城戦で曹操軍に手柄を取られたとは言え、間違いなく誇るべき戦果を上げた。

張三姉妹は曹操軍が討ち取ったと聞いている……だが、信じてはいない。

直属の密偵によれば張三姉妹は元々ただの旅芸人だったらしく、いわゆるファンの肥大化に乗じて乱を画策した者たちが今回の戦の首謀者というわけだ。

しかし余計な加入があつたとはいえ数万の人々を集めた力——歌唱力は凄まじい。

人材好きと言われている曹操だ、それを有効活用しないほうがかしいのである。それに、黄巾党に参加せずとも張三姉妹を好きだった者たちもいるだろうから、余計な反感を買いたくないはずだ。

これから恐らく曹操陣営からの檄文によって反董卓連合軍が形成されるはず。書いたのは陳……宮？ 陳琳？ 陳羣？ うろ覚えな上読んだのは演義だけだから信憑性は薄いが。

機会があればカマをかけてみるか……いや、何の利益も無いか。確証無しではどうにもならないしな。

経済力・軍事力・求心力が高まった今必要なのは、情報収集力。

白蓮の知り合いの俠客ネットワークを当てにする訳にもいかない。

今は優秀な諜報部隊の育成が急務である。

「ふう……」

目が疲れたしちょっと休憩するか。

「ふう……」

また溜め息をついてしまったが……うん、しょうがないしょうがない。

リラックスを兼ねて浴場へ来ている。

蒸し風呂では無く、現代的な大浴場である。

真桜のおかげでこうしてゆっくり風呂に浸かることができる。

ビバ、天然ガス。ビバ、油田。そしてビバ、真桜！

まだ試作段階くらいなため、設置は城のみだが……もう少し経てば街にも公衆浴場を開けるだろう。温泉を掘り当てられれば一番い

いんだけどなあ……そんな時間的余裕はないし。

化石燃料から放出されるエネルギーは莫大で、ほんの少しの燃料から得られる熱エネルギーにより湯を温めている。

電気は作り出せるだろうがそれを使うものがまだ無いため保留。

燃料についてはこれくらいなら後世にも影響はあまりないのではないだろうか。

何はともあれ毎日風呂に入れるというのは現代人にとって至福である……

「あゝあゝ……気持ちいいーなー」

そこ、おっさんくさいと言わない。

と、そこへ。

「御遣い様、太守様がお呼びでございます」

「んゝ……急ぎ？」

「はい、出来る限り早急にとのことでした」

「……了解しました」

おちおち風呂に浸かってもらえないとは。

湯船から上がり、タオルで身体を軽く拭く。

……なんで手触りが何一つ現代と変わらないタオルがあるんだろう……
……と思ったが、そもそもここがオレの知っている歴史では無いのだ

からと納得することにした。

さっさと浴室に出て白蓮のところに向かうか……

「風呂上がりの牛乳でもあればいいんだけどなあ」

「牛乳、ですか」

「うん、牛乳………は？　って国譲さんなぜここに！？」

そしてじつと見ないでくださいっ！？」

「いえ、私が伝えに来ましたので。それに殿方の身体とはこうなっているですね」

……確かに中からは声を判別しづらいからそれはいいとして。じつと見られるのは恥ずかしい。そして国譲さんが少し頬を染めていることに気づき、無表情だけど感情はしっかりあるんだなど、改めて確認した。

「太守様や子龍様には既にお見せになっていらっしやるのでよろしいのではないかと思ひまして」

「ぶっ………」

あれか。「昨晚はお楽しみでしたね」ということですね。わかります。

「………つとこんな話してる場合じゃなかった！」

すぐさま服を着て白蓮のもとへ向かうのだった。

「反董卓連合？」

「そうだ。董卓が洛陽を牛耳り、好き勝手やっているらしい」
「それで袁紹からの手紙、と……」

曹操ではなかったか。それはどうでもいいんだが。

「きな臭いな……」

「一刀もやつぱり？」

「ああ。暴虐を尽くし民を徒に苦しめていると書いてはあるが……特に根拠は無いしな。董卓は西涼の出だよな？ 名門の袁家を差し置いて田舎者が重用されていることへの嫉妬……みたいな感じの無いかな」

嫉妬から生まれる事件なんていくらでもあるしな。

「……………心当たりが有りすぎて怖い」

……………どれだけ単純バカなんだろう、袁紹。

そして白蓮の表情がすごくいたたまれない。

「ま、利用させてもらおうよ。董卓側に勝ち目はほぼ無い。だから連合側で戦功を上げて、もし洛陽が何も無ければ保護。そんな感じかな」

「それだと虎牢関を先頭で破らなければいけませんねー」

「虎牢関……いやな予感が」

「あわ……絶対に抜かれてはいけない難攻不落絶対無敵七転八起虎牢関には恐らく呂布を。シ水関には華雄に加え抑えに張遼が配置されると思いましゅつ。あう」

なんか四字熟語がいっぱい並んでるよ。加えて、将たちの特徴も

四字熟語。

彼女ら———またもや女性———の情報は既に伝わっている。

一騎当千の呂布、知勇兼備の将・張遼、猪武者の華雄。

1人だけ四字熟語じゃないのは気のせいだろう。うん、気のせいだ。

「正直、星ですら呂布の相手になるかどうか……」

「む、主。それは聞き捨てなりません」

「そこらへんは戦場で自分の目で確認してくれ」

「むう……」

そのまま軍議はお開きとなり、時が流れ、公孫の旗を持つ軍勢は洛陽に向け出立した。

第6話 反董卓連合・序章・続（前書き）

袁紹の檄文に応じ、反董卓連合への参加を決めた幽州軍。

彼らは洛陽近くの合流地点へ出立するのだが…？

第6話 反董卓連合・序章・続

オレたちが合流地点に着いた時、連合軍の主要人物による軍議が行われていた。

袁紹、袁術、孫策、曹操、馬騰の名代として馬超。

いずれも後世に名を残した英雄ばかりである……のだが。やっぱりみんな女の子だった。

いやオレとしてはむさい男どもに囲まれているよりよっぽど良いから大歓迎なんだけどね。

「天の御遣いというわりに随分と貧相な顔ですね」

おい、天の御遣いと顔は関係ないだろう。

みな『天の御遣い』に興味津々といった様子で、天幕に入り名乗ってからと言うもの常に視線を浴びているという状況である。

それはともかく……総大将が決まっていないのは何故だろう。別にオレたちを待っていたわけでもあるまいに。

（白蓮、なんであんなあからさまにアピ……自己主張してる袁紹を誰も総大将に推薦しないんだ？）

（推薦には責任がつかまとうからな。もし、もしの話だが、総大将が使えなかった時のためだよ）

つまり正直袁紹は使えないと言いたいんですね……いや、期待出

来ないと言った方が正しいか。

(それに……)

(ん?)

まだ何かあるのだろうか。

(……あいつを推薦するのってなんか腹が立つと思わないか?)

(ああ……)

納得してしまった。

確かに高飛車お嬢様系金髪縦ロールを推薦するためだけに自らの精神力を費やす必要なんて無いな。

現に曹操はさっきからずっと腕を組んで不機嫌そうな表情をしているし。

袁術はどう見ても子供でしかも寝てるし。

馬超と孫策はこっちばかり見てるし。

しかし……係累は無いと言えば無いからな、オレが袁紹を推すべきか?

(さっさと終わらせよう。オレが推薦するよ)

(……悪いな一刀)

よし、じゃあ――

「すみません、遅れちゃいましたっ」

――― 出鼻をくじかれたっ………！

「平原から来ました劉玄德です」

「おつ。遅かったな、桃香」

「あ、パイパイちゃん♪ それに御遣い様も！」

「白蓮だっ！」

いつになったら白蓮と呼んでもらえるんだろう……

きつとそう思ってるな。

初めて桃香に会った時もこんな掛け合いをしていたことが思い出される。

白蓮の同学の友人、劉備を始めとする面々が幽州を訪れていた。

「桃香、よく来たな！」

「パイパイちゃん久しぶり♪」

「白・蓮だっ！」

「あはは、ごめんごめん。ところでお願いがあつてきたの。私たちを雇って貰えないかな？」

雇う、か。

「話は聞いている。簡単に言えばお金が無いんだろ？ こう言っちゃなんだけど装備もかなりボロいし正直ひどいな……一刀、いい

よな？」

やっぱり白蓮って善人だなあ……オレとしては関羽・張飛が戦力に加わるのだから構わない。

と言うかオレに聞くな太守。貴女の問題です。

まあうちは天下統一なんて野心は無い。民が平和に、そして日々の生活に困るような暮らしをしていない限りは統治下に置く気はさらさない。

基本は専守防衛。幽州の秩序を乱すやつらにはそれ相応の対応をするまでだ。

今後自立するのだろうが、白蓮との関係、そしてオレたちと彼女らの理想を鑑みるに、恐らくお互い乱世で生き残っても戦うことはないだろう。

むしろ幽州からでは遠隔地になってしまう地域——蜀との交易はかなり魅力的だし、より多くの民を助けられる。

なら出立する際にはいろいろ支援してあげようかな。

うーん。我ながら優しすぎる。劉備から発せられる雰囲気があるのだろうか。

「白蓮ちゃん……えっと、その人は？」

「ああ、こいつは北郷一刀。内政から軍事まで幅広く私を助けてくれる『天の御遣い』で、その……わ、私の恋人だ」

そんなに照れくさそうに言われるとこっちも恥ずかしくなってくる。

「この人が御遣いさま……え！？ 恋人！？」

「白蓮殿、『私の』ではなく『私たちの』ですぞ？ ああ劉備殿、某は趙子龍と申す者。以後お見知りおきを」

「……えーと、とりあえず後ろの方々を教えてくださいませんか」

話題を変える。ニゲテナイヨ？

「あつ、はい。向かって左から関羽、張飛、諸葛亮です。諸葛亮の隣にいるのは鳳統ちゃんと程呈ちゃん、彼女らは御遣いさまに仕えたいらしいので仲間ではありません」

関羽は美髯公ではなく女性だから艶やかな黒髪なのか。さながら美髪公と言ったところ。

張飛は武器でわかった。蛇矛がすごく目立つ。

関羽は良いとして……張飛・諸葛亮・鳳統・程呈（190センチオーバーの大男のはずがどうしてこうなった）はどう見ても幼女です、本当にありがとうございます。

しかし鳳統と程呈がオレに仕えたいと？ 有名になったもんだなあ。

「程仲徳と申しますー。風と呼んでください」

「鳳土元です。雛里と呼んでくださいますか」

なんて感じに。

あの後愛紗と星が仕合いしたりオレが武を鍛えて貰ったりしたのだが……それらが語られることは無いだろう。

今までオレが行った政策が評価されたのだろうか、桃香・愛紗・鈴々・朱里に真名を預けてもらうまでになった。

そして黄巾賊討伐戦での活躍が評価され、桃香たちはオレが渡した物資とともに平原へ去っていった。

ちなみに白蓮は鎮東將軍の地位と“正式な”幽州太守としての地位を貰っている。

今まではあくまで前任者の代わり。あまりにも中央からの干渉が無さすぎて、さらに治安が酷すぎて耐えられなくて、そのまま太守として居座っていたらしい。

よくある話だ。

あと、どうでも良いけど白蓮に近い俠客筆頭は簡雍さんだそうです。白蓮と桃香の話に出てきたのを聞いた。

しかし簡雍といえば最初期からずっと劉備に従っていたはずなのだが。

朱里や雛里——諸葛亮や鳳統——と会う時期もおかしいし……だがこんな疑問も今さらか。

何はともあれ。

「久しぶり、桃香。それより御遣いさまはやめてって言っただろ？」

「なら一刀さん？　なんか新婚さんみたい……」

「いやいや劉備さん頬を赤く染めないでください。可愛い。はっ、デジャブ！？」

「ちよつとあなたたち私を差し置いて何をごちゃごちゃと話しますの！？」

「あゝ総大将は袁紹で良いんじゃない？　推薦します」

「そこまで言われれば仕方ありませんわね！　この私が総大将になつて差し上げますわ」　おーほっほっほー！！」

やりたかつたくせに。

総大将が決まったのを期に、

「決まったようだから先に失礼するわ。行くわよ春蘭、秋蘭」
「はっ」「」

曹操が、

「めゝりゝん私たちも戻ろつか」……そうだな」「じゃねっ、
天の御遣いさん」

孫策が、

「あたしたちも帰るぞ」「あーんお姉さま、蒲英公疲れて歩けないっ」「嘘言っとなっ！」

馬超が、

「うにゆう……七乃お、終わったのかえ？」「終わりましたよお嬢様」」「ならこんなところに用は無いのじゃ。さっさと帰って蜂蜜水を飲むのじゃー！」「はいっ」

袁術が、続々と去っていく。残ったのはうちと桃香たちのみ。

「オレたちも戻ろうか……」
「……うん」

桃香も連合内の関係に気付いたようだった。

自陣に戻り桃香たちと談笑してから少し経ち、曹操が訪ねてきた。

「邪魔するわ」

「はいはい……って曹操さん？ あの……うちの大將は劉備のところに行っていていないんですけど……」

「構わないわよ。むしろ好都合。私が用があるのは貴方だから。それとさっきは助かったわ……」

さつき？ ……ああ総大將のくだりか。ってオレに用？ 何でまた。

「わからないって顔してるわね……貴方、自分がどれだけ幽州に

貢献してるかわかってるの？」

「いえ……」

「稀代の軍師が私から貴方に鞍替えするくらいよ」

風か雛里だが……朱里と雛里には来る途中で会ったって言ったし、風とは陳留近くで会ったって言ってたし。

なら風か。でも……

「うーん？」

実感ないなあ。

「それに貴方の打ち出した政策が尽く功を奏して幽州の治安や農商業は急激に成長したそうじゃない。それに貴方の本は読ませて貰ったわ。続きを楽しみにしてるわね」

それについては国譲さんに言うてください、なんて言えるはずもない。

「とりあえず単刀直入に言うわ。貴方、うちに来なさい」

「……………は？」

「貴方は民を助けたいとらしいけど、出来る限り戦わず話し合いで片付けたいと思っている劉備と違って現実主義者。それならば私の覇道にその力を貸しなさい」

なんという上から目線。

「……お断りします」

「それは何故？」

「幽州は居心地が良い。それに大事な人たちを見捨てては行けませんから」

「その大事な人たちを守るために他の民はどうなってもいいと？」

「そうではありません。困っている人々がいれば駆けつけますし、志を同じくする劉備たちが幽州から遠い地方を救ってくれるはずですよ。それに……他の場所も孫策さんや曹操さんが善政を敷けば問題ないでしょう？」

「何故袁紹でなく私たちを、袁術ではなく孫策を挙げたのかしら？」

「人の使い方、地の利、時の見定め、において曹操さんは袁紹さんに全て勝っています。袁術さんは、虎の子を飼えるはずもない」

「……ふうん。それを聞いてますます貴方が欲しくなったわ。けど今日はこれで失礼するわね。ただし、私は欲しいと思ったものは全て手にいれる。それを覚えておきなさい」

言い残して身を翻す。

「……幽州の地を徒に乱すものにはそれ相応の代償を払って頂きますので」

「……ふふっ」

心底面白い、といった表情で笑ってから去っていく。

「……ふうん」

やっぱり英雄は纏っている雰囲気が違うなあ……

白蓮にもそれくらいのオーラを発せられるようになって貰わないと。

第7話 反董卓連合・破章（前書き）

総大将・袁紹を筆頭に泗水関に駒を進めた連合軍。

編成についての簡易表は以下の通りである。

総大将 袁紹

前軍 劉備軍

中軍 袁紹軍

左翼 馬超軍

右翼 公孫贊軍

後軍 袁術軍

遊撃 曹操軍・孫策隊

攻撃力のある孫策らは別動隊扱いとなっている。

第7話 反董卓連合・破章

泗水関の守将は華雄・張遼。

朱里曰く華雄は自分の武に絶対的な自信を抱いているため、挑発して釣り出す予定らしい。

援軍も望めない董卓軍が打って出るとは思わないのだが……

華雄相手なら必ず成功すると。

いざとなったら、華雄を打ちのめしたことがある孫堅を母に持つ孫策に頼むそうだ。

出来れば孫策の出番無く桃香たちに戦って貰いたいが……オレたちにはオレたちの役割がある。

結果を祈るしかないか。

「伝令！ 前曲の部隊が敵軍との交戦圏内に入りました！」

開戦間近だな……

無論ここからも関は見える。

相手が打って出て来たらいいよ左右騎馬軍の出番だ。

「て、敵將軍が関から出てきました！」

「……ホントだ」

単純なんだなあ、華雄。

ん……華雄と対峙するのは愛紗か。

ともに歴史に名を残す——残念ながら序盤で華雄は消えるが——
——武将の対決である。愛紗の実力は知っているけど、どんな闘いになるか見物だな。

ふむ……一見すると愛紗が押し込まれているようだが……？

お。押し返し始めた。

「ふう……雑魚の相手に手加減するのも骨が折れるな」

あからさまな挑発。しかし相手は乗ってきた。

「キサマ……！ 我が大斧の錆にしてくれるわっ！」

他愛もない……いとも簡単に挑発に乗るとは。だが裏を返せばそれだけ自らの武に自信があるということ。

実際、手加減はあくまで口上のもの。相手が冷静ならば良い勝負となっただろう……それでも私は勝つが。

「うおおおおおおお！！」

「ふっ、怒りで曇った太刀筋など容易く読める……はああああっ！」

渾身の一撃。

決着は、一瞬。崩れ落ちる華雄の身体がそこにはあった。

「命までは取らないが……敵将華雄、劉備が一の家臣、関雲長が捕らえたり！」

さて、あとは……

「よし今だ、突撃ッ！」

白蓮の号令とともに幽州軍が突撃を開始する。

特に白蓮を先頭に先陣を切って走る白馬義従は壮観で、かつ美しい。

と、同時に馬超軍も動き出す。

「うわ……」

猛将・華雄の部隊をやすやすと蹴散らしていく。

流石西涼騎馬隊、白馬義従に勝るとも劣らない破壊力である。

「我らも遅れをとるなッ！」

「「「おおおお!!」」」

将を失った部隊などもの数で無く、泗水関攻略戦は早々に幕を下ろしたのだった。

泗水関を占領した連合軍は、虎牢関での戦いに向けて英気を養っていた。

その中で幽州軍はと言うと。

「ちよつ……一刀それはまずいって主に私の武的な意味でっ!？」

「んー? 大丈夫だよ」

「なんだよその自信は……」

「ふん……さつさと殺すがいい」

元気だなあ。何か良いことがあったのかい?

いやそんなメメしいネタはいい。

「殺す気はないよ、華雄さん」

彼女を縛る縄を外す。

「……キサマらの武では徒手空拳の私ですら抑えられんぞ?」

あらら。やっぱり一流の武人には力量差が手にとるようにわかるのか。

「自らの武に自信を持つ貴女だ、生かされて捕らえられて放されて……おめおめと逃げ帰るようなことはしないだろ？」

「……ふん」

「で、だ。縄を解いたのは対等に話をしたかったから」

「私の主は董卓さまのみだ。キサマに降る気は無い」

だろうな。簡単に降るような人間なら捕らえさせず愛紗に任せていただろう。

「うん、構わないよ。だけど1つ良い？ 貴女の主人である董卓は、民のために何をしたいか言ってなかったかな」

「……苦しむ人々を少しでも減らしたいと」

白蓮から袁紹の人柄を聞いてはいたが、やはり董卓は無実なのかも知れない。

出世を妬んだ袁紹の仕業か、宦官ども——十常侍が実権を掌握しているのはこの世界も変わらないらしい——に罪を着せられたか、或いは両方が。

「そんなことを言う人間である董卓が、洛陽で暴虐の限りを尽くしている」と袁紹の檄文にあったが？

「あれは宦官どもがッ！！」

やはりな。

「なら洛陽に入ったら董卓の保護が最優先だ。馬超、桃香たちにも伝えよう。いいよね？ 白蓮」

「ああ、勿論だ」

「なっ……それならば賈馱も助けてやってくれ。董卓さまといつも一緒にいるからすぐわかるだろう。他の奴らは武人だ、保護は必要無い」

「良いだろう。伝えておく」

袁紹が意図的に虚偽の情報を流したのか、宦官のせいだと本当に知らなかったのか。

後者の可能性が高そうなのがある意味で怖いけど。

「……それはそうと、さっき貴女はさっさと殺せと言ったな？」

それは間違っている。

「貴女には多くの人々を救える力がある」

少なくとも武においてオレに到底出来ないようなことがきつと出来る。

「主君への忠義？ 甘ったれんなよ。それを理由に貴女が死を望んだら、救われるはずだった命が失われるんだ。……貴女の主はそんなことを望むのか！？」

「……それは」

「オレに、白蓮に仕えなくなつて別に良い。各地を放浪すれば良い。むしろそのほうが多くの人々が救われるだろう。顔がバレるのが気掛かりなら仮面でも隠せば良い、名前だって変えれば良い」

幸いうちには仮面の予備がある……幸い、か？

「……しかし私は関羽に負けたのだぞ」

「そうだ、それは事実。だが大事なのはそこじゃない……負けを認め、自分の欠点・短所を見つけ、次を見据えて努力しろ。命さえあれば何回負けたって良い、負ける度に次は負けないと屈辱を糧にして武を磨け。それが民を救う力となるんだ」

「……」

「貴女はオレや白蓮とは違う。オレや白蓮個人に貴女のような武は無い。だからこそ貴女に頼んでいる。……偉そうなことを言っただけ悪かった」

言うべきことはもう無い。あとは本人がどうしたいか、それだけだ。

「……フツ。おかしなヤツだ……だが、良いヤツでもある。良いだろう、私の力を貸そう。私には真名が無い、だから私のことは華と呼べ。それが董卓さまたちのところにいた時の愛称だ」

「ありがとう、華。北郷一刀だ。一刀って呼んでくれ」

「ああ。よろしくな、一刀」

これにて一件落着かな？

「また一刀の周りに女が……」

白蓮が何か呟いている。けど小さくて聞こえん……

「何を勘違いしているかは知らんが公孫賛、私は旅に出るぞ。武を磨き民を救うための旅を、な」

華には聞き取れたみたいだが……武人は耳も良いのか？ それとも女性同士だからだろうか。

「本当かつ！ いや、流石にこれ以上増えるのは不味いと思ってたんだ。あ、私のことは白蓮で良い」

さつきまでビビってた白蓮がもう華と打ち解けてるのは……すごい変わり身の速さだ。

「白蓮、お前も苦勞してるんだな……」

「ああ……主に心勞だ」

なんか盛り上がり始めたんだけど。

「あー……盛り上がってるところ悪いんだけど、とりあえず華はこの戦が終わるまでうちで身を隠してて。誰かに見つかると面倒だし」

「ん？ ああ、わかった」

今度こそ一件落着かな。しかし終始緊張してて膝がガクガクだ……

最後まで締まらないなあ、オレ。

「これは北郷殿。華雄はどうなりましたか？」

「うん、力を貸してくれるってさ。ところで桃香はいるかな？」

「はい、お連れ致しましょう」

愛紗に先導されて天幕の中へ。桃香は……のほほんとしてる。あ、いつもか。

「あ、一刀さん！……今何か失礼なことを考えなかった？」
「ソナナコトナイヨ」

やはり女性の勘は怖い……

「なんか怪しいけど……とりあえず兵馬と兵糧ありがとうござい
ました♪ 貰った塩と味噌は売ったんだけど……平原の城がちょっ
と酷くて改修に使っちゃったんだ。あはは……」

兵士1万人が1年暮らせる額を渡したはずだったんだけど……し
かも桃香が幽州を去った時には兵士5000人だったから単純計算
で2年持つし。

どんだけ酷かったんだろう。

「本当は少し余ったんだけど……街や村の人の生活が目も当てら
れなくて」

……ま、桃香たちらしいか。

「いいよ。愛紗に華雄を捕らえてきて貰ったんだ、お釣をあげて
もいいくらい。ということでの戦で窮乏しそうな桃香をもうちよ
つとだけ支援してあげよう」

華雄と華雄の武は当然お金の価値では表せない。けれど彼女の今
後、それが無駄ではなかったとわかる時がきつとくるはずだ。

「一刀さん大好き♪」

うん、柔らかい……

「こほんっ」

愛紗がいたのを忘れてたっ！

「あ、あはは……愛紗ちゃん、顔が怖いよ？」

「そのようなことありませんっ！」

「いやいや愛紗、眉間にシワが寄ってるってば。美人が台無しだよ？」

「び、美人などそのような！」

なんで自分の外見のことを理解してない人って多いんだろう。風とか白蓮とかみたく。

いや理解していたらしていたで男を手玉にとりそうで怖いけど。星とかさ。

「本人が思っでなくとも周りが思っでるのさ」

「いや、その……いえ、ありがとうございます」

うんうん、わかってもらえて何よりです。

「そういえば桃香、星は？」

「星ちゃんなら鈴々ちゃんと手合わせしてるよ」 鈴々ちゃんも

星ちゃんも出番が無くて持て余してるみたい」

仮面の話……はいいか。

「ん、わかった。適当に戻ってくるよう言っておいてくれる？」

「うん、了解しました」

「じゃ、これで失礼するよ……っと、忘れてた」

桃香に近づき耳打ちする。

「洛陽に入ったら董卓と賈馱の保護を最優先でお願い」

愛紗にも同様に。

「やはり、ですか？」

「そうみたい。んじゃそういうことでまたね」

次の相手は泗水関を退いた張遼と呂布。

張遼を薄情だとは思わない。華雄が打って出た時に勝敗は決まっていたんだ、守ってもしようがないだろう。

しかし神速と一騎当千か……厳しい戦いになりそうだ。

第8話 反董卓連合・破章・続（前書き）

ついに虎牢関決戦の日を迎えた連合軍。

果たして一刀たちは董卓・賈馮を助け出すことができるのだろうか。

第8話 反董卓連合・破章・続

虎牢関。

泗水関を攻略し、ついにたどり着いたのだが……

「またかよ……」

「ごめんね、一刀さん」

「いや今のは桃香じゃなくて袁紹にだよ」

泗水関での活躍を評価（という名の嫉妬）された再び桃香たちが先鋒を任されていた。

こちらとしては華雄の件もあるし食糧・兵馬ともに貸すことに躊躇いは無い。

食糧に関しては多めに持ってきていたし、いざというときの保存食も用意してある。

幽州でも人気のあった桃香のもとで戦うなら兵も不平不満は言わないだろう。

しかし問題はそこじゃない。

「なんで袁紹が」

そう、何を思ったか先鋒の桃香たち後ろには袁紹軍が控えていた。

大方桃香たちに戦わせてその際に洛陽一番乗りを狙っているんだろうが。

当然の如く曹操・马超・孫策・白蓮は反発。

董卓軍には援軍が無いため、いつまでも城に籠っていることも出来ずいつかは打って出てくる。演義では劉備・関羽・張飛を相手にひけをとらない闘いを演じた飛將軍に袁紹軍で勝てると思わない。そこに張遼が加わるなら尚更だ。

本人は数の力で問題無いみたいなことを言っていたが……確かに戦において敵軍より多くの兵数を揃えるのが常道ではある。しかも今回は攻城戦であり、兵数が5倍近い差の連合と董卓軍間においてそれは間違いではない。

ただ。

元は農民の者たちが多かったとはいえ黄巾賊3万を1人で殺したと言われている呂布相手にそれは正しい選択なのだろうか。

休憩中に愛紗に聞いたところ、正直言っただけと華とはほぼ五分五分だったらしい……華雄が挑発に乗らなければ。

その華をして齒が立たないと言わせる呂布の武力は相当なものだということが窺える。

「愛紗、武人として一騎打ちをしたいかも知れないが、今回は自重してくれ。鈴々も星も闘いたくてウズウズしてるから3人で頼む」

「……仕方ありませんね」

「呋、愛紗たちの加勢に行くかは臨機応変に頼むな」

「はい、隊長！」

うむ、良い返事だ。あとでいい子いい子してあげよう。流石に頼りになる。それと帰ったら犬耳をつけて可愛がってあげよう。

「真桜は攻城戦まで待つててくれな」

「はいな。くう……やつとウチの出番かあ……たいちよに『ご褒美』貰えるよに頑張るわ」

「なつ……ま、真桜！」

「なんや、凧は欲しく無いんか？」

「沙和も『ご褒美』貰えるように頑張るの！」

「沙和までっ！？」

あの……勝手に話を進めないでいただきたい。

「隊長！ 私も頑張りますから！」

真っ直ぐな瞳がこちらに向けられる。オレの意思は無視ですか。

「い、いや落ち着け凧。沙和、訓練の成果を見せてもらっからね」

「はいなの！ 最近は沙和が何か言う度に一部でやる気が上がって訓練が楽なの〜」

……うちの兵の性癖を考慮して沙和隊に配属すれば死兵レベルになるのでは無いだろうか。

いや死なせるつもりは無いけどさ。

凧には真面目で努力家、向上心がある兵を。

真桜には多芸もしくは一芸に秀でている兵を。

騎馬は白蓮だし。

星は……まあ余ったのでいいや。

「んうつ……！？」

「どうかしたのか？」

「いや何か不愉快なことを言われたような気がしてな……」

「ふーん……そんなことより早く続きをするのだ！」

「あ、ああ……」

「白蓮、張遼は神速、呂布は飛將軍と呼ばれるくらい騎馬の扱いに慣れている」

弓術の腕、騎馬の扱い……それらを含めて『飛』と呼ばれるのだろつ。

「そうか……」

「でも白蓮なら負けない。勝つことは難しいかも知れないけど、白蓮の腕があればきつと負けることはないよ」

公孫賛・劉備軍の主要な武将が呂布を相手にしなければならぬ今回、呂布と張遼の取り巻きを相手する役割が重要になってくる。

真桜と沙和は基本的に——馬には乗れるが——歩兵だから白

蓮しかない。

主君に危ない橋を渡らせたくないんだが……

「……ああ。一刀にそう言われると心強いよ」

「それなら良かった、かな。明日オレは別動隊を率いるから白蓮の傍にはいられないけど、お互い幽州に笑顔で帰れるよう頑張ろうな」

「そうだな。まだまだやることは沢山ある」

コツン、と拳を合わせる。

そして、明日へ向けて身体を休めるのだった。

決戦当日の朝、白蓮の天幕には隊長格が揃っていた。

「編成は雛里の言った通りだ。そして今回は私も出るが……みんな生きて帰ってきてくれ」

「」「応!」「」

白蓮の言葉を聞き、それぞれが持ち場に向かう中、最後に出ていく当の白蓮が天幕の入り口でこちらを振り返った。

「一刀、行く前をお願いがあるんだ」

「くうっ……！ コイツは化け物かッ」

戦いは均衡していた。

呂布には愛紗・鈴々・星が立ち向かうが、決定的な一打が入らない。

加えて呂布の隊は一人一人が並々ならぬ武を持ち、風が加勢に行こうとするのを妨げていた。

「はぁあっ！ ふうっ……沙和、そっちは大丈夫か！」

「まだまだ大丈夫なの！ コラそのウジ虫ども！ へばつてないでウジ虫はウジ虫なりに働くのっ！！」

「『『『おおおっ！』』』」

若干名恍惚とした表情をしていることには触れるべきではないだろう。

「隊長……急いでください」

そしてその頃、白蓮は張遼隊と剣を交えていた。

「白馬長史の名は伊達じゃないぞっ！」

「太守様に遅れをとるな！」「『『うおおおおおお！』』』」

「くっ……いくら白馬義従が相手や言うつてもこないな強さとはッ

……！」

「お前が張遼か！ 白馬長史、公孫贊が相手になってやる！」
「アンタが公孫贊か……ええやろ、一騎打ちや！」

相手に向かって馬を駆けさせる。

一閃。

「やるなあ！」「そっちこそ！」

馬首をかえし、また一閃。

「ふっ……！」「はあっ！」

（時間を稼ぐだけのつもりだったが……心が、身体が、軽い！
いける、いけるぞっ！）

一合、二合、三合。

「得物の長さに差があるっちゅうに互角やと！？ こんな強いなんて聞いとらへんで！」

「私はみんなと、一刀と一緒に幽州に帰るって決めたんだ！
——たあっ！！」

白蓮の剣は空を切ったかのように見えた。が……

ツウ……

張遼の頬からは一筋の血が流れ落ちていた。

「はっ、おもしろくなってきたやんけ！」

張遼が再び気合いを入れ直すと同時に、無情にも銅鑼の音が鳴り響く。

「まさか恋が……！？ くっ……この勝負、預けたる！」

隙を見て張遼は脱出、張遼隊も彼女の後を追ひ、去っていく。

「太守様！ 追撃は！」

「追わなくていい！ 隊列を立て直してこっちも下がるぞ！」

「はっ！」

「……はははっ、やった……やったぞ一刀お！」

呂布への加勢を防ぐために張遼を足止めする。

白蓮はその任に対し十分すぎる程の成果をあげたのだった。

時は少し遡る。

呂布対愛紗・鈴々・星の戦いは未だ決着がつかず、しかし、確実に呂布の体力を削っていた。

個々が武を持つ呂布隊も数には勝てず、少しずつ、少しずつその数を減らしていく。

と、そこへ。

「今や！ 李典隊、駆け抜けてぶちかませッ！」

北郷隊に周囲を護衛させ、戦場を駆け抜けて行く。

「衝車設置完了しました！」

「よっしゃ！ 『すぺしゃる衝車くん』、いったれ！」

衝車が門を打った時、大地が震えたように感じたのは錯覚だったか。

「もう一発や！ いくでえ！」

「……お前たち、邪魔」

「一刀殿のところへは行かせん！」

「お兄ちゃんたちには指一本触れさせないのだ！」

「主からの命ゆえ、通させんよ」

3人と対峙しながらも城門に意識がいったその一瞬だった。

「今です！」

朱里の合図とともに呂布の身に網がかけられる。

「っ！？ ……卑怯」

「ごめんなさい、呂布さん……でも、董卓さんたちを保護するには洛陽に一番乗りするしかないんです」

ですから、貴方との戦いをできる限り早く終わらせなければいけな

かつたんです、と朱里は言う。

「我々だつて納得いかんのだから我慢してくれ」

将を失つた呂布隊は虎牢関内に戻ろうとするが、白蓮がそれを許さない。

「おつとここは通さないぞ？ 逃げ道は無い、武器を捨てておとなしく投降しろ！」

白馬義従の名を、そして実力を知っている呂布隊は、地面に武器を置いて帰順したのだった。

「うらああー！」

ガゴオオオン……！

真桜改良の衝車による二撃目に耐えることが出来ず。天地を揺るがすような振動と大きな音を立て、門が崩れ落ちていく。

「よし、これで騎馬は入ってこれないだろう！ 風、真桜、沙和は民の保護優先で董卓たちを手分けして探してくれ！ オレと桃香も搜索だ！」

「はい！」 「任しときい！」 「はいなの！」

「さ、桃香。桃香の護衛には馬超さんが、オレには馬岱さんがついてくれるらしい。……必ず助け出そうな」

「うんっ！ 馬超さんよろしくね」

「ああ、行こうぜっ！」

華との約束があるからだけではない。本来悪いのは十常侍であり、董卓たちにはなんの罪もないのである。

だからこそ必ず助け出す。必ず。

「馬岱さん、オレたちも行こうか。頼んだよ」

「まっかせて♪」

「手筈通り隊列を整えて入城する。伝えた通り他の軍を通さないように兵士間を詰めて通路ギリギリまで広がれ！ 怪しまれない程度に出来る限りゆっくり入り入るぞ！」

主も随分無茶な命を下すものだ。だが、無茶であっても無理ではない。

「あとは任せたぞ、主よ」

第9話 反董卓連合・急章（前書き）

虎牢関を制した一刀たち。

一刀は華との約束を果たすため桃香とともに董卓と賈馱を探しに行く。

果たして結末は。

第9話 反董卓連合・急章

「へう……」

董卓を発見したと馬超から内密の知らせを受け、向かった先にいたのは…

触れてしまうと壊れてしまいそうなくらい華奢で小柄な、そして儂げな美少女だった。

ちなみに桃香を1人には出来ないので馬超はダッシュで来てダッシュで戻っていったが走るスピードが有り得ないほど速かったのは余談だろう。

「桃香」

「うん、そうだって」

……そうか。

白蓮から董卓の人柄を聞いてはいた。それに女性だろうということも予想していたが……

さすがにこれは……ねえ？

（つてことは隣のメガネっ娘が賈馱？）

桃香に耳打ちする。

（うん、助けたいって言ったら教えてくれたよ）

この娘たちが洛陽で暴虐の限りを尽くしたと噂の董卓に賈馱だとは誰も思わないだろう。

「ねえ劉備、さつきから話してるけど誰なのよコイツ」

……あつ、名乗るの忘れてた。

「一刀さんは『天の御遣い』だよ」

「コイツが？ 確かに光る服なんて見たこと無いけど……」

「オレのことはいいとして、無事で良かったよ。華との約束だからね」

「華って……華雄將軍は生きてるの!？」

はて、華と呼ばれていると言っていたが……呂布とか張遼みたいな武官側だけなんだろうか。

「うん、彼女の力があれば少しでも多くの民を救うことが出来るからね……説得した」

「……良く出来たわね。とにかく、生きてるなら良かったわ」

「あの、御遣いさま」

何かを決意したような表情で董卓ちゃんに問い掛けられる。

「何かな？」

「私の真名は月と言います」

「ちょ、ちよつと月!？」

「詠ちゃんも」

「……はあ。真名は詠よ。これでいいんでしょ、月？」

うん、と言って顔を綻ばせる董卓ちゃんが可愛い。

「……えっと、なんで？」

「劉備さんから教えていただきました。私たちのことを助けたいと仰ったのは御遣いさまだと」

桃香も別に言わなくていいのに……面と向かって言われると気恥ずかしいな。

「いや、当然のことをしたまでだよ」

「その『当然のこと』を当然のように出来ることが重要なよ。巷で噂の仁君である劉備ですらアンタから話を聞くまでその可能性に気付けなかったんだから」

もっとも、軍師は知ってて情報を握り潰したのかもしれないし、それに気付いたとしても何も出来なかったでしょうね、と賈馱は言う。

確かに今の桃香たちに連合を相手するほどの力はないから……

「ですから、私たちの真名を受け取っていただけませんか」

「そっか……オレは北郷一刀。よろしくね月、詠」

「へう……」

「ま、これから劉備の下で真名で過ごさなきゃならないわけだしどうせ教えることになってたわよ。アンタ劉備と仲がいいみたいだし……ってなに月を誑かしてんのよっ！」

「うおっ!？」

あ、あの男の急所はやめてください……あと数センチで直撃して

たから。

「……詠ちゃん」

「だ、だって月え〜！」

「は、はは……とりあえず月と詠は桃香のところに行くってことでいいの？」

「そうよ。劉備たちには恩義があるからね」

董卓・賈馱を助け、華雄・呂布を捕らえた。唯一張遼だけはわからないが……曹操の軍が何やら動いてたらしいから白蓮の足止めをくらったあと逃げ延びたか捕まったんだらう。捕まったなら人材好きの曹操が殺すわけもない。

「御遣いさま。私たちは桃香さんたちの下へ行きますが、それは別に貴方の下へ行かせたい人がいます……よろしいでしょうか」

「いいよ。あと出来れば名前と呼んでほしいかな」

「へうう……」

「……月に怒られるから今回は蹴らないでおくわ。それとその娘は今、身を隠してる。ほとぼりが冷めたところに行かせるけど……それでもいいわね？ きつと戦力になるから」

「わかった。つとあんまり長話もな……じゃあオレはここで失礼するよ」

「うん、またね一刀さん」

早く白蓮のもとに行かねば。

その思いとともに少し早足で戻るのだった。

「一刀っ！」

「おわっ……」

天幕に戻った瞬間、白蓮が抱きついてくる。

「無事で良かったよ。ケガは無い？ それとなんでそんなに……」

「聞いてくれ一刀！ あのなあ、張遼と一騎打ちして傷を負わせたんだ！」

……一騎打ち？

「……………え」

……ええ！？

「一刀に、その…抱き締めてもらったあとからなんだか負ける気がなくて、それに戦ってる時も身体が軽かったんだ！」

驚いた。張遼は星といい勝負くらいだとつけていた。さらに騎馬戦となれば星の勝ち目は激減する。その相手に無傷で、なおかつ一撃いれてくるなんて……

「一刀、これが愛の力って言うやつだな！」

興奮状態の白蓮は結構恥ずかしいことを言ったのに気にもとめない。

「ははは……ところで華は？」

「ん？ あいつなら離里に地理を教わりにいったぞ？」

へえ……放浪する際の行き先の目安をつけるためだろうか。

「ありがとう。ちょっと行ってくるよ」

「うん、じゃあまたあとでな！ 愛……くふふ」

ニヤニヤしてる白蓮をおいて華のもとへ。

「ん、一刀か。上手くいったのか？」

「うん。月と詠、これでわかるよね」

「そうか……これでお前が私にした約束は果たされた。これから私が約束を果たす番だな」

「雛里に地理を教わったのはそのため？」

「ああ。盗賊や貧困にあえいでそうな民がいそうな場所をな」

「会わなくていいの？」

「大丈夫、問題ない。いずれ何処かで会うこともあるだろうさ」

「それもそうだな……はい、これ。華蝶仮面のやつ」

渡したのは星愛用——白蓮や雛里は気付いてないらしい——
のマスク。

「確かに受け取った。では私もそろそろ行くか」

「もう行くのか……いや、ならこれも渡しておくよ。塩と味噌とお金。最初のほうは大変だろうから使つてね」

「む……ありがとう。世話になったな」

「次に会う時は平和な世の中であつたらいいな」

「そうだな。そのためのお前と私だ。頑張ろう」

「ああ。じゃあな、華」

「またな、一刀」

身を翻し去って行く。

最後までかつこよかったな、華。もしオレが女で華が男なら惚れていたかもしれない。オレもああいう風になりたいな。

新たな目標を見つけることができたし、今はみんなで幽州に帰ろうか。

反董卓連合解散から早1か月。戦後処理は大変だ。幸い戦死者はいなかったが重症者がいないわけではない。

兵役をこなすことができない兵に（内）職を斡旋したり、溜まっていた書類——それでも風や国議さんたちのおかげで通常の量に2割増しくらいで済んだ——を片付けたり。

烏丸はどうだかわからないが、連合参加組との戦はしばらくはないだろう。

内政もまだまだ発展途上。上下水道の整備や衛生環境の改善などのインフラは、まだ手をつけていないことが多い。

だけど充実している。街の人々の笑顔が見られるのだから。さ、もうひと頑張りするか。

コンコン、とノックの音が響く。ノックに関しては入室の際の心得として広めている。

「どうぞ」

「失礼します」

現れたのは国議さんだった。

「御遣い様にお会いしたいという方がいらっしやっています。な
んでもこの紹介状をお見せすればわかる、と」

そう言つて一通の手紙を受けとる。

「ん……月と詠からか」

ならば話は一つだな。

「わかった、今行くから国議さん、白蓮呼んできてもらえる？」
「かしこまりました。……それと手紙をお渡しになった方は大層
可愛らしい女性でしたよ。では失礼します」

若干怒つてる？

まあいい、とりあえず客が先だ。

「君が月と詠の関係者でいいんだよね？」
「そーよ」

可愛らしい、けど気の強そうな女の子。

なんとなく曹操を彷彿とさせる印象だ。

「これからお世話になるわ。よろしくね」

差し出された手を握り、握手を交わ――

「っ！」

瞬間、投げられそうになるが踏ん張る。

「……！　へえ……武はからつきし、ってわけでもないのね」

「武に関しては一応鍛えてるし、鍛えられてもいるからね。オレは北郷一刀。『天の御遣い』のほうが有名な」

鍛えてると言っても恐らくあつちは軽々、こつちはかなり本気。

やはり差が有りすぎる。

「いきなりこんなことされて怒らないんだ」

「試そうとするのも無理はないと思うからね。それに綺麗な女の子には弱いんだよ」

「……変なやつ」

「よく言われるよ。ところで名前を覚えてもらってもいいかな」

「いいわ。少しだけだけどあんたのことを認めてあげる。私は――

――」

やっぱり曹操みたい、と思ったのも一瞬だけ。

なぜなら続く言葉に驚いたから。

「——董白。字は叔穎よ。月姉さまの妹。改めて、よろしくね」

史実における董卓の孫娘。彼女はこの世界で、妹として登場したのだった。

実弟の董旻さんマジ涙目だろこれ。

外伝　く田豫、一刀と出会う（前書き）

物語を田豫さんの視点から書いたものです。

外伝　く田豫、一刀と出会った

こんにちは。田豫と申します。

……私は誰に向かって話しかけているのでしょうか。ですがそうしなければならなかった気がします。

まあそれは良いとしましょう。

ところで今日、太守さまが1人の男性を拾った……お連れになりました。

白く輝く服。なんでも『ぽりえすてる』という素材で出来てるとかなんとか。

時たま出てくる未知の言葉。天の国にいらっしゃったころの癖なのでしょうが、無意識に言ってしまうそうです。

ですがその言葉を訂正し、私たちがわかる言葉に言い換えてくれるので大変助かりますし、勉強になります。

書き留めて纏め、出版すれば好事家たちには良い値段で売れるのではないのでしょうか。紙は高級品ですが、それ以上の値段でも大丈夫そうな気がします。

幽州は太守さまのおかげで平和ですが、やはり貧しくもあります。

その収入があれば少しは役に立つでしょうし、ここだけの話私自

身も両親や祖父母への仕送りの額が増やせるのではないかと考えています。

戦や病で近しい人を亡くしたことはありませんが、裏を返せば人数に応じて生活費がかかります。

最近では太守さまに認められ、昇進・昇給がありました。

小さいながらも私室を与えられ、これ以上は高望みというものでしょう。

そう思っていた時期が私にもありました。

「国譲、一刀……ああ天の御遣いのことな。北郷一刀というらしい。それでなんだが……一刀に政務をしてもらおうと思ってな」

特別手当でも出すからさ、と言われ、迷うことなく返事をしました。勿論了承の意です。

特別手当で目当てというよりは、興味本意といったところででしょうか。

実際に接してみてもどのような人柄なのか、天の知識はどのようなものなのか。

それに触れてみたかったです。

さて、これから御遣いさまのところへ向かいますが……はたしてどのような方なのでしょうか。

「失礼します」

「あ、初めまして。北郷一刀です。よろしく願います」

「御遣いさまの読み書きに関してお教えさせていただく田国譲と申します。以後お見知りおきを」

爽やかな好青年、という第一印象。しかし私が名乗った時に僅かながら驚いていらっしやったのは何故でしょう。

「あ、ああ……よろしく願います、国譲さん。あと、御遣いさまはやめて貰えませんか？ そんな大層な人間ではないので」

「そういうわけにはいきません。それと私には敬語ではなくて構いません」

天からやってきて、太守さまのみならず、あまつさえ趙雲さまにまで認められた人物が大層な人間でなかったら私たちはどうなるのでしょうか。

そう私が言うとき少し悩んだ末、——名前だけは『さん』付けのままですが——敬語ではなく話していただけるようになりました。

少し慌てた表情をなさったのを可愛らしいと思ったのはここだけの秘密です。

何はともあれ開始した政務。

呑み込みが早く、わからないところはすぐに質問してくださるた

めこちらとしても教えるべき部分が明確になります。

翌日から続く政務。やはり凄まじい『すぴーど』でコツを『ますたー』していきます。

私としても教えがいがあるというものです。

ふと気付くと御遣いさまがこちらをじっと見つめています。

「私がどうかしましたか？ ま、まさか2人きりだからといってそんな……いやん」

ああ、私の故郷には愛しき殿方が……

いませんけど。

「やるならそれらしく照れてください、お願いします」

正論ですね。

ですが上手く頬を染めることが出来ませんから、これは課題です。

そろそろ終わりそうになってきました。

御遣いさまは『ふいにつしゅ』に向けて『ペーすあっぷ』してきます。

仕事を早く正確にこなせるようになったのは教えた私としては嬉しいのですが、少し寂しくもあります。

「……よし、終わったっ！」

「お疲れ様です」

「んじゃこれを」

「はい、確かに」

書類を集め、次は警邏または視察です。残念ながら私はついていきませんので、こっそり御遣いさまを護衛しているらしい趙雲さまに頼んで様子を聞かせてもらいましょう。

趙雲さま曰く子持ちの美人な女性に見とれていたそうで。

なんでしょう、すごくイラッとききました。

それよりも御遣いさまと趙雲さまは黄巾による襲撃を受けている村の救援に向かうとかで、すぐに太守さまのもとへ向かっていってしまいました。

怪我などをなさらないか心配ですが私に出来ることはありません。

ただ無事を祈るばかりです……

結果。無事に帰ってきました。

その際に新たな武官候補として3名の女性が御遣い直属の部隊に編入されたそうです。

……

実直、真面目、堅物。しかし御遣いさまの前では従順な子犬のようにパタパタてしっぱを振っている……そんな印象の楽進さん。

技術面において繊細さと大胆さを兼ね備え、私からみても——
少しだけ私も自信があったりします——羨ましいほどの大きさをもつ李典さん。どこかとはあえて言いません。

おしゃれに気を配りながらも戦いをこなせる服装を選ぶ『センス』のある于禁さん。

そこに趙雲さまと太守さまが加わるため……選り取りみどりです。いですね、と御遣いさまに言います。決めました。

まだまだ伝えたいことが……いえ、誰に？ とは聞かなくてください。伝えたいことがあるのですが。

今回はこのへんで失礼しようかと思えます。

では、また。

第10話 石鹼作り（前書き）

反董卓連合が解散し、幽州へ戻った一行。

戦後処理の仕事が多くあったが、それすら吹き飛ばす出来事。

それは、董白の加入と疫病の発生であった。

第10話 石鹼作り

「——董白。字は叔穎よ。月姉さまの妹。改めて、よろしくね」

董旻さんはあんま有名じゃないからいいとして……いやいやいや似てないにも程があるでしょ！ 確かにきめ細かい雪のような肌の白さには素晴らしいものを感じるけど！

「あ。あと月姉さまに手を出したら……どうなるか教えてあげよつか？」

「全力で遠慮します」

曹操と詠を足して2で割ったような人格か……うん、ヤバイ。ヤバイヤバイ。大事なことから3回言った。

「……とりあえず名前はどつする？ 変える？」

「必要ないわ。刺客くらいならなんとかなるけどあんまり多いと流石にムリってただただ。今は大丈夫でしょ」

確かに1人なら多勢に無勢だが、うちの軍の相手にわざわざなりにはこないだろう。てかわざわざ董白が幽州にいと喧伝するつもりもないし。

それに董白をこつちによこしたのは少しでも血が絶える可能性を防ぐためだと思って間違いないはず。

まあ、桃香たちというなら月たちは安全かな……

徐州と幽州の二方面作戦は流石に……いや曹操なら有り得るな。

「とりあえず董白も騎馬主体の戦法でいいのかな」

「そうね……白馬義従がいいわね。同じ白の字を持つなんて運命的じゃない？」

やめてくれ、白蓮が泣く。

「うちの太守は真名に白が入ってるから駄目だな」

「そうなの？ 仕方ないわね。じゃ騎馬ならなんでもいいーわ」

「ちなみに実力は？」

「……あんた馬鹿にしてる？ こっちは異民族を年がら年中相手にしてんのよ」

「あー、悪かった。んじゃ編成しておくよ。それと部屋はあとで案内させるからまずは顔見せ、な」

幽州軍はこうしてまた騎馬が強化されるのだった。

「疫病による死者多数、か……」

顔見せを兼ねた歓迎会の翌日。新たな問題が漢を襲っているのを知った。

「幸い幽州では発生していないみたいだけど大陸的に原因を断つのが先だな」

医者が少ないこの時代だ、治療より衛生環境を整えるべきだろう。

三国志で有名な医者と言えば華陀であるが、未だにその名を聞いていない。

だから出来る限り華陀を頼りにせず解決するしかない。

清潔性を保つには……………石鹼？

相変わらず資金は豊富だからやるだけやってみよう。

～石鹼作り～

石鹼は油汚れを落とせるし、細菌やウイルスにも有効だ。

空気中に漂うようなものには対策が難しいが。

さて。

今回は脂肪酸中和法によって石鹼作りを行うつもりだ。この方法だと皮膚や粘膜にやさしい石鹼が出来る。

脂肪酸。

牛の脂肪部分に水を加えて煮出した固形脂を使用。

アルカリ。

農業用に使っている草木灰はアルカリであるため、量には困らない。

かといって環境破壊を助長していいというわけではないし、草木

灰に加えワラ灰も用いる。

そして実際に真桜とともにやってみた。

牛脂を取り出すため、牛を食用にする際に脂肪部分を大量に貰ってくる。

女性が多いこの世界で脂肪部分の大半は廃棄されていたため、肉屋のおちゃんにも渡りに船だったようで、これを使って衛生環境を改善するというと喜んで差し出してくれた。お金を払っても構わなかったんだけどね。

そして脂肪部分を巨大な鍋というより釜にいれ、牛脂の抽出を行う。

「独特なおいやなあ……」

「石鹼にするとそのにおいもほとんど無くなるみたいだよ。でも試しに香りつきのとか作ってみてもいいかな」

煮出し、煮出し、煮出し……

乾燥するのを待ったため別容器に移しかえて2、3日ほど寝かせる。

「お、固まっとる固まっとる」

草木灰とワラ灰は燃やすだけ。

石鹼を作る前に上下水道を完成させたかったが如何せん中国である、地方とは言えども幽州は広大だ。完成には至らなかった。

インフラ整備は莫大な金がかかり幽州はそれをクリア出来る資産を有しているが、人的資源は有限である。

だがしっかり実験してから石鹼の使用の是非を考えよう。

「こんなんであえ？」

真桜に渡されたのは現代のものと見紛うばかりの出来栄だった。

「うん、においも見た目も大丈夫。実際使ってみるから食堂に行こうか」

油を手に垂らし水で洗う。が、水は弾かれるばかりだ。そこで石鹼を泡立て、洗う。

「……おお？」

油が取れた。

「おばちゃん、ちょっと皿貸してね」

まだ洗い終わっていない皿を借り、最初はまたもや水濯ぎ。やはり水は弾かれるばかりだ。そこでまた石鹼を布につけて泡立て、皿を擦る。

「……おお！」

取れた。

「やったぞ真桜、完成だ！」

「連日の徹夜が報われるってもんやなあ」

しみじみと真桜が話す。

そう、一刻も早く疫病に対応するために真桜は寝る間を惜しんで石鹸作りに勤しんでくれていたのだ。

失敗が無かったわけではなく、失敗を人が知らないだけなのである。

「ごめんな、こんなこと急に頼んで」

「皆のためなんやろ？ それにウチの努力で多くの命が救われる
っちゅうんなら苦労も報われるってもんや」

「真桜……」

本当に。心から真桜がいて良かったと感じた。

「あ、でもたいちよ、当然『ご褒美』はくれるんやろ？」

「……へっ？」

「わかつとるくせにこのっ、うりうり〜、それと連合の時のも
忘れたとは言わせへんよ？」

「は、はは……」

……っひ、干からびるっ！？ 侍女の皆さんに頼んでおこっ……
干からびてたらお湯を口から注いで3分後待つてください、と。

一刀と真桜の努力が実を結んだ。石鹼を贈られた各地の反応を記しておく。

〔曹操〕

「公孫賛から贈り物？」

「はい、なんでも疫病対策に役立て欲しいとのこと。生産に関わったのは北郷と李典のようですが」

魏の玉座にて、曹操は荀或からの報告を聞いていた。

「ふうん、それで中身はどのようなものかしら？」

「石鹼と呼ばれるものが大量に入っておりまして、使用法に関する説明書も同封されていました。ここに」

如何にも興味が絶えないといった様子で曹操は渡された小紙に目を通す。

その興味が疫病対策になるという石鹼に向けられたものか、はたまた真桜、または一刀に向けられたものかは誰にもわからなかった。

「流琉」

「はい、お呼びでしょうか」

曹操は親衛隊のためすぐそばに待機していた典章を呼びつけた。

「今日の晩餐の後、これに従ってやってみなさい」

「ええと……ふんふん、わかりました。やってみます。あ、紙はお返ししますね」

「そうそう、桂花。これは私たちだけに送られたわけではないわ

よね？」

「他には袁姉妹に劉備、西涼方面にも送っていますね。わざわざ全ての送り先を筆記してあります」

「争えども民を苦しめるは本意ではない、か……幽州だけで使っていれば疫病に嘆く他国など簡単に落とせるのにねあるいは高値で売りつける、とか。ああ……あの男を私のものにするのが楽しみだわ」

うつとりとした表情で呟く。

「そんなんっ！ あのような素性不詳の胡散臭い男なんて！ それに噂によると女にだらしない全身精液孕ませ男のようですしっ！」

「その『素性不詳の胡散臭い男』が民のために様々な革新的政策を打ち出したり石鹼とやらを生産したりしてるのよ？ それに、英雄色を好むというじゃない」

私がそうであるようにね……もっとも北郷が英雄にふさわしいかはこれからわかることだけど。

と曹操は付け足す。

「ふふ、嫉妬かしら？ 可愛い娘ね……今宵はイジめぬいてあげるわ」

「ああっ、華琳さまあ！」

今日も魏は百合百合しく、かつ平和であった。

く馬超く

「贈り物？」

「うん、疫病予防につて」

「疫病予防か。だけど母さまはもう病にかかっているしな……」

「あ、あと叔母さまを治せるかもしれない医者、がいるかもしれないって小紙も入ってたよ。お姉さま、どうしよつか？」

「北郷はいいやつだったからな……賭けてみるか。よし、必ず見つけ出すぞ！ ダメだったらそのときはそのときだ」

「りょーかい」

〽劉備〽

「一刀さんから？」

「はい、疫病対策にと」

「わゝこれで沢山の人を救えるねっ！」

〽袁術〽

「贈り物？ はちみつかや？」

「1人1個で孫策さんたちにもちゃんと渡したらはちみつも送るそうですよ」

「本当かえ！ よし七乃、早速手配するのじゃ！」

「はいはい」 渡したってだけ言っておけばいいのにさっすが美羽さま」

「ははは、もっと褒めてたも！」

実際には一刀は孫策に確認をいれるため問題は無かった。

く孫策く

「石鹼、ね」

「ああ。ただでさえ絶対数が少ない我らだ、とてもありがたい」

「一緒にお酒もくれればいいのに……」

「……雪蓮」

「わかったわよ冥琳だからそんな怖い顔しないでっ!？」

く劉璋く

「石鹼? そんなことはどうでもいいから酒だ酒!」

「劉璋さま……はい、ただいまお持ちします……」

く袁紹く

「文ちゃん、石鹼だつてさ」

「北郷のアニキからか……ん? 『文醜さんへ? なになに……
…うお! よーし斗詩! 風呂行くぞ風呂!」

「え? ちよっ……文ちゃん待つ……引つ張らないでー! 一体
何を書いてあつたの!？」

手紙のタイトルは『石鹼を使ったお楽しみ時間の過ごし方』だっ

たそうな。

ちなみにこの時袁紹が先に入っていて大混乱となるのは余談である。

「おにーさんおにーさん、各国から感謝状が届いているのですよ」

「悪いね風、国譲さん」

「いえ、とんでもない」

相変わらず表情に変化のない田豫さんだが、最近僅かな変化をわかるようになった。

確実に今、ほんの少しだが微笑んでいるはずだ。

「北郷さま、未だに距離を感じますので、今後は楓」かえで」とお呼びください。我が真名にございます」

「うーん……オレのことを名前で呼んでくれたらね」

「楓」に対してオレだけ「北郷さま」なんて嫌だし。

これで国譲さんともっと仲良くなれるかな……

なんて考えていたら。

「では今後は『ご主人様』とお呼びしましょう」

「……は」

返答が斜め上過ぎた。

「本気？」

「はい」

「………はあ。ならそれで。よろしくね楓」

「はい、よろしく願いします」

「おにーさんおにーさん、手紙をずっと持つてる風は疲れたのですよー」

「ごめんごめん………って重くないだろこれ。まあ、悪かったよ」

風の頭を撫でてやる。

「ご主人様、私にはしていただけないのですか？」

そう言われたので逆の手で楓も撫でてやる。

部屋の前で手紙を持つ2人を両手で撫でるオレ。

……シユールだ。

「何やってんのあんた」

「白ちゃんにはおにーさんの手は渡しませんよー？」

「別にいらないわよ」

「そう言ってしまったことをいずれは後悔しますよ？」

「はいはいごちそうさま」

じゃね、と手をひらひら振りながら董白は遠ざかっていった。

そのままオレは2人を撫で続けているのだった。

第11話 幽州防衛戦（前書き）

石嶼を各国へ送り、各地での疫病発生率は大幅に低下。

幽州は他各地に恩を売ることに成功したのだが……？

第11話 幽州防衛戦

第11話 幽州防衛戦

さて。

オレは今、何をしているでしょうか。

わかつたら金一封をあげよう。嘘ですごめんなさい。

正解は……

「たいちよ、おいてくで？」

荷物持ち、である。

「ちよつ、ま、真桜」

「これくらいでへばつとんの？ だらしないなあ」

「いや、この量はどうかと……」

両腕に抱え、顎と首元で挟み、頭に乗せ……そんな状況である。
もつと褒めてくれてもいいんじゃないかな……クスン。

しかもその全てが。

「プラモかよ……」

「プラモて何なん？」

「からくり人形のこと。オレのいた時代では木じゃなくプラスチ
ックっていうやつとかだったけど」

プラモはあんまり詳しくない。手先が不器用だったからね。

「ほお……なんかええなあそれ。いつかたいちよの故郷に行ってみたいわ」

故郷、か。

家族、及川、不動先輩に剣道部のみんな……元気にしてるかな。

「……たいちよは帰りたいん？ 自分の故郷……家に」

「いや……オレの家はここだよ。愛する人も愛してくれる人たちもいる、それにまだまだやりたいことは沢山あるんだ」

「そか。……たいちよ、次行くで次っ！」

「え、まだ行くのっ!？」

「あつたりまえやん」

ニヒヒ、と笑い再び歩き出す真桜についていく。気を使わせちゃったか。

「まったく……」

はあ、おいていかれないようにしないな。

――昨日はたつぷりと絞られ、昨日はプラモ以外のものを背負われ、またたつぷりと絞られた。

し、死ぬ……

しかしそんな弱音を吐いている場合ではなかった。

「『袁紹に動きあり』か」

密偵によると袁紹軍では幽州への侵攻を狙っているらしい。

「ふむ…… 恩知らずとはこのことか」
「麗羽のやつ……」

星の言葉は遠からずと言ったところ。白蓮は呆れ果てている。

「石鹼に恩を売る意図はまったく無かったとは言切れないけど……
それが主目的ではなかったよ」

争いはないほうがいいからね。

「それにしても性急ですねー。まあ大体理由はわかりますけど」
「大方反董卓連合でほとんどの戦功をうちに奪われたというのが理由だと思いましゅ。……ます」

最近雛里は噛むと言い直すようになった。成長なのか？

「それに石鹼のことを上回るほどの大義を見つけたのでしょうかねー。
雛里ちゃんはわかりますよね？」

「はい。石鹼がうちからのものだとは袁紹領の民の皆さんは知られていないと思います。が、袁紹さんがそんなこと出来る、するとは思われていないのでそこはうちの功になっているでしょう。未知なものはすべて『御遣い』に帰結しますから」

そうか、とりあえず珍しいのは天の物だと。

「それで大義とは何なんだ、雛里」

白蓮、それは太守としてどうだろう。オレでもわかるよ。

「主……これが白蓮殿なのですから、そんな可哀想なものを見る目を向けないでやってくれませぬか」

星は相変わらず容赦ないなあ。

「な、なんだよみんなわかるのか!？」

「はい」「はいー」「当然ですな」「うん」

雛里・風・星・オレである。

「ええっ!？」

「……反董卓連合はなんのために組まれたんだっけ？」

「ええと……洛陽で悪政を行っていたから？ 結局は真実ではなかったわけだけど」

「それで、董卓はどこへ？」

「桃香たちのところだろ？」

いやそこで気付こうよ。

「……で、最近うちにきたのは」

「董卓だなあ。……ああ!」

「」「はあ」「」

「正直すみませんでした……」

どこから董白の情報が伝わったのかは知らないが、つまり董卓の妹がいることを理由に攻め入ると。

洛陽の住民は月の無実を知っているが、他国の領民は董卓の悪政を信じているはず。

妹がいれば二の舞になりかねないという大義名分だろう。

「うちは籠城戦は余裕でいけるし野戦でも騎馬無双。風・真桜・沙和がいるから歩兵もよし。問題は弓なんだよなあ……」

太史慈・沙摩柯・黄忠などがいいところか。黄蓋は呉の宿将だからいるだろうし、夏侯淵は曹操のもとにいた。仲間にするなら後に加わった人が狙い目だろうか。

弓の扱いに長けた将がいるとだいぶ違うものである。

「無い物ねだりしても仕方ないですぞ」

星の言う通りだ、現状の戦力で考えよう。

「守るか攻めるか。どうする？」

「だいぶ幽州も落ち着きましたし、攻めるのがよろしいかと」

「賛成です。騎兵たちも暇をもてあましていますから」

「だってさ。最終決定権は大将だよ、白蓮」

「……よし、出よう。私自身麗羽にはいろいろとあるからな」

若干黒いオーラを放つ白蓮によって、反撃することに決定したのだった。

総大将 公孫賛

総参謀 程旻

前軍 董白・北郷

中軍 公孫賛

左翼 楽進・于禁

右翼 趙雲

後軍 李典

「そろそろだな」

「そうね」

新参として実力を示すために董白は前軍に配置されていた。

「それにしてもいいわねこの騎兵。涼州のにも劣らないし」

なんたつて長所だからな。

「鎧があるからうちは騎兵の数・質ともに上げる時間がたっぷりあるんだよ」

「鎧もあんたが作ったんでしょ？　一回その頭をかちわって中を見てみたいわね」

「……冗談に聞こえない」

笑顔で得物に手をかけるなっ！

なんて雑談をしていると。

「……来たわよ」

袁紹軍との戦いが始まった。

「な、なんなんですかこの有り様は！？」

「北郷のアニキたちつえーな」

「感心してる場合じゃないでしょ……」

開戦から半日も経たず、戦況は幽州軍の優位が確定。

というか袁紹軍は指揮系統が分断され、騎兵で追い回され、回り込まれ……10万と号した兵は散り散りになった。

袁紹軍にも騎兵はいたのだが兵の練度は足下にも及ばず、主を失った馬たちは幽州軍にまんまと確保されていく。

すでに戦局は決していた。

「姫、退かないと不味いですよぉー！」

「……し、仕方ありませんわね、今日のところはこれで勘弁して

あげますわ。オーッホッ『失礼します』……ってなんですよのいいところで！」

「あ、いえその……と、とりあえず報告いたします！ 曹操軍が袁紹さまの留守を狙い攻めいったとのこと！ 至急帰還せよとのことです！」

「な、なんですって！？ あの金髪クルクル小娘……斗詩さん、殿「しんがり」は頼みましたわ！」

お前も金髪クルクルだろ、と伝令の兵士が思ったかは定かではない。

「え？ ちょっと姫！？」

「斗詩、頑張つてな！」

「文ちゃんまで……」

頑張れ、斗詩！ 負けるな、斗詩！ きっといつか必ず報われるさ！

「大勝だな」

こちらの損害は軽微。あちらの被害は甚大。

文句無しの勝利である。

「……」

「おゝい董白？」

「……いた、袁紹ッ！ あいつのせいで姉さまが……ッ！ー！」
「お、おい！？ くそッ」

撤退していく袁紹軍を見下ろしていたが、突然董白が馬を駆けさせて行った。

袁紹・文醜はいいが、顔良が殿だった時はまずい。

日が浅いとはいえ董白は大事な仲間。

見捨てるわけにはいかない。

「くっ……！」

—— 囲まれた。

董白は窮地に陥っていた。

弓兵に囲まれ、馬を全速力で駆けさせるもその身体には数本矢が刺さり、数多の矢傷を負っている。

「まずったわね……」

馬を射られ、何とか転倒に巻き込まれて足を挟まれるという事態は避けることができていたた。

が、すぐには動けないというのが現状である。

「勝手に先走った挙げ句にこのザマか……ま、もともと厄介者みたいなものだったし」

——死んでも文句は言えないわね。

独りごちる。

と。

「董白ッ！ 何処だ！」

「えっ……」

——何やってんのあいつ……

しかしこれは好機。

「っ……っっ！」

「そこか！ 今行く！」

力を振り絞り立ち上がる。

「捕まれ！」

当然敵も追撃してきているため、立ち止まって乗馬するなど出来ようもない。

一刀は限界まで身体を倒し、董白を包むように掴む。

「ぐっ……」

一刀は右腕のみで人を支え、董白は右腕との衝突による衝撃を必然的に受ける。

だが、一刀は決して離さない。

「早く、上がって、こいつ！ 右腕だけじゃっ……」

「失礼、ね、そん……なに重く……ない、わよ」

「喋らないでじっとしてろ。今、馬にくくりつけるから……」

手綱は放すことになる。乗馬の経験が浅い一刀なら落馬していたかも知れないが、鐙のため何とか身体のバランスを保っていた。

だが。

「よし……ぐあっ!？」

周囲への警戒を疎かにした報いか、弓兵に射掛けられていた。

さらに手綱を握っていなかったこともあり、落馬は免れなかった。

「ちよっ……」

董白は引き返すために無理矢理身体を起こそうとし、

「止まるなッ、考えるなッ、振り向くなッ！ オレは決して死なない！ だから行けエ!!」

一刀は起き上がりながら強く叫ぶ。

元凶たる董白にそんなことが出来るはずもない。必死に止まろうとする。

しかし。

「このっ、止まりなさいよっ！」

一刀の馬は主の意志を受け取ったかのように董白の言うことを聞こうとはしなかった。

（それでいい）

すでにかなりの距離が開いていたが、董白にはそう、聞こえた気がした。

「……っ！！」

最終的に行き先を馬に任せた董白はしっかりと戦線を離脱し、さらに幽州への帰還を果たしたのだった。

一方、一刀はというと。

追っ手を避け林の中へ。木が弓を遮蔽するため、弓兵の力は大幅に削られる。

「おいおい……」

行き着いた先は崖の上。対岸は遠く、その間を流れる川までは10メートルほどの高さであろうか。

後ろからは追っ手。やるしか、なかった。

「……南無三つ！」

川へ跳躍する一刀を追わず、十分に任務を果たしたとして、追っ手は本隊の後を追っていった。

「ゲホッ……はあっ、はあっ、はあ」

——随分と流されたか……けど、まだやることは沢山ある、んだ……

流れの緩いところで何とか岸に上半身乗せる。

「帰らなくちゃ……みんなのもとにつ……」

体力の消耗、矢傷に加えて体温を奪われた一刀に余力は無く。

「あ、れ……？」

その意識を失った。

「む？ あれは」

——あの服には見覚えがあるな。

近寄り、よく見てみると、矢が刺さり水で濡れた服で体温が奪われているようだ。

「仕方ない」

——偵察の帰り道で思いがけないものを拾ったようだ。

幽州の治政を見、戦局の確認も行っていた彼女はそんなことを考えながら応急処置を始める。

「……よし」

濡れた服を脱がせ——優男のわりには引き締まった身体を見て感心しつつ——、怪我した部分に愛用の褌を包帯代わりに巻いてやった彼女。

その名を、鈴の甘寧こと甘興霸と言った——

- 白龍翔天 - 第一章・完

第12話 オモイノキズナ（前書き）

袁紹軍を散々に打ち破り、勝利の余韻に浸っていた面々に届いた一報。

それは将に限らず兵達をも震撼させた。

早馬が着き、兵を送ろうとしていたところにさらに悲報が舞い込む。

曰く、天将——近頃はこう呼ばれる——である一刀が乗っていた馬に満身

創痕の董白が縛り付けられた状態で戻ってきた。

その後ろに一刀の姿は無く……

第12話 オモイノキズナ

身体が、揺れる。

一定のリズムで腹を圧迫される感じがなんとも心地悪い。

「ううっ……」

「……気付いたか」

目を開ければ視界は全て白。

……そっか。オレ……死んだのか。

まだまだやりたいことはあったのになあ。

「何を言ってるか知らんが少し黙ってる。舌を噛むぞ」

ん？

（うわっ！）

突然全身に浮遊感。

（うぶっ！？）

と思ったら腹部に激しい衝撃が。

再び一定のリズムでオレのお腹が圧迫され、……オエ。

なんとしてでも吐くまいと悪戦苦闘していたところ、床に転がされる。

「思春、首尾は？」

「それについてですが蓮華様、偵察帰りにこのようなものを拾いました」

その会話とともにオレの視界が開けて……って袋詰めにされて肩に担がれていたのか。

「石鹸なるものを送ってきた北郷です」

「ほう、これが」

見れば孫策さん、ではなく少し小柄なのでおそらく孫権さんが孫尚香さんだろ

うと思われる人が覗き込む――

――嘔吐感で極限まで蒼白になったオレの顔を。

「ちょ、ちょっと思春？ 彼、顔色が随分悪いわ……って今にも死にそうよ

アナタ穏やかな表情で目を閉じちゃダメっ！ え、衛生兵――！
？」

叫び声が、訝「こだま」した。

「うつ……ここは」

記憶が……いやうん、覚えてる。

とりあえず吐き気が酷くて倒れたんだっけ。体力が落ちていたのに加え、矢傷を負ったのが響いたか。

……ん？ 包帯が巻いてある。甘寧さんがやってくれたのかな。

お礼を言わなくちゃ。ってどこに行けばいいんだろう。

「あ、その人ちよつとすみません」

廊下を歩いていた侍女さんに声をかけ行き方を聞く。最後まで連れて行ってくれるらしい。非常に助かります。

「孫権様、客人がお見えになりました」

あれ？ 甘寧さんの所に連れて行ってもらえるように頼んだのに。そう考えていたことを見抜かれたのか、侍女さんが話しかけてくる。

「甘寧様は孫権様の護衛も兼ねていますので、恐らく一緒にいらつしゃるか。もしいらつしゃらなければ孫権様にお聞き下さい。孫権様がお呼びになればすぐにいらつしゃるでしょうから」

それなんて忍者。

そのまま去っていく侍女さん。えっと……

「あのー、北郷ですが、入ってもいいですか？」

「ああ、かまわないぞ」

中から声が返ってくる。許可を貰えたので、入る。

「包帯を巻いて頂いたお礼を甘寧さんに伝えたいのですが見当たらず……」

「そういうことなら……興覇」

「はっ」

どこから現れたのか、いや天井からなんだがスツと孫権さんの隣に音もなく降り立つ甘寧さん。

「あ、この包帯ありがとうございました」

「……それは包帯ではなく禪だ。私の予備のな」

「え……」

「……キサマ今、何を考えた」

「い、いえ、何も！」

一瞬で首筋に曲刀を突きつけられたらこう、どもってしまつのはしょうがないだろう。

「興覇」

「はっ、申し訳ありません」

ほっ……首筋から冷たい感触が無くなっていく。

「と、とにかく。この命を救っていただいてありがとうございます」

す。まだ死ぬわけにはいきませんから」

「仲謀様を始め呉に利益があると考えただけだ」

「そうだな。北郷、石蝸のことも含め貴方の人柄を信じ、助力を乞いたいと思う」

「助力……袁術の下からの独立、孫呉の再興。そんなところですか」

まあ、史実ですからテンプレですよ。

「……そうだ。各地に同朋が散らばっているうえ、資金力もない。それをどうやって解決しようか、天の知識を借りようかと思つてな」
「兵数についてはオレがどうにかできることではないですから、資金面でお手伝いしましょう。命を救っていただいたことに比べれば軽いものです」

そう、自惚れかもしれないがオレの知識を使って沢山の人を救えるという可能性がある。だから、絶対死にたくなかった。製塩方法、あとは蜂蜜もどきの作り方を伝えれば十分に資金を得られるはず。

「袁術に売るための蜂蜜もどきの作り方と、製塩方法をお教えしましょうか」

荊州、袁術領内。主である袁術と張勳は玉座にいた。

「美羽様、孫策さんが蜂蜜を持ってきたそうですよ」

「なに、蜂蜜じゃと！　そ、それで蜂蜜は何処にあるのじゃ！」

「孫策さんが持ってきてきますから、もう少々お待ちください」

「孫策め……妾を待たせるとは何事じゃ」

大の蜂蜜好きの袁術。金に糸目は付けず、そのため張勳は金銭面のやり取りに若干苦勞しているが、「愛する美羽様のためですから」と言いながらこなしていた。

「待たせたわね」

「おお！ 孫策、早く妾に蜂蜜をよこすのじゃ！」

孫策から蜂蜜を詰めた壺を貰おうとしたが、ひょいつ、と上に掲げられてかわされる。

「あげないわよ。売りに来たの。最近は兵糧もともに買えないし、武器は折れるし防具は穴が開いているわ。ということですがに戦鬪で支障が出ると思っからお金欲しいのよねー。買ってくれるわよね？ これだけの量があるけど」

「こんなに沢山蜂蜜があるのは初めてなのじゃ！ 七乃！ 孫策の言い値で全部買いじゃ！」

「い、言い値で全部ですかー……孫策さん、値段はおいくらですか」

これよ、と孫策は明細書のようなものを渡す。

（……あれ、適正価格が、それ以下。安いですね。商売観が無いのでしょうか）

まあでも安いに越したことは無いです、と張勳はその場で全額を支払い、蜂蜜をすべて購入した。

（ふふ〜ん）　ちょ、ちょっとくらいならお酒に使ってもばれな
いわよね）

辺りをきよろきよろと見渡しながら酒屋へ入っていく。店内には
他に客が一人しかいなかった。

「おじさん、これちょーだ——」

「何をしているのかな、伯符」

ギギギ、と硬直させた首を機械のように後ろへ回す。

「な、なんでめーりんがここに！？　いや、その、そう！　お母
様にお供えするための——」

「御託はいい。帰るぞ」

「——お酒ええええええええええ」

店主は孫策の引き摺られる姿を見て涙したという。

「はあ……」

あの後めーりんにたっぷりと説教されて足がまだ痺れてるわ。

でも、思春も北郷を拾ってくるなんてね。どうせならこっちに持
ってきてもらいたいけど……ま、そのうち会えるでしょ。

それよりも製塩方法か。それに蜂蜜「モドキ」。思春が言うにはあれは甜菜「てんさい」という大根を煮詰めて作ったものらしい。

北郷のいた国では蜂蜜や砂糖の代わりになっていたそうね。まさか普段食べてる大根を煮詰めれば蜂蜜のようなものになるなんてわからないから早速栽培を拡大したらしいし。

それに味見をさせてもらったけど蜂蜜とは大差ない味。とは言っても蜂蜜はほんの一掬いしか舐めたことないから甜菜と比べるのは微妙だけど……

でも、大量生産できる野菜から出るアレを蜂蜜と同じ価格で売れたためすごく国庫が潤うんじゃないかしら。私のお小遣いも増やしてくれるといいな！。

めーりんは予想外の収穫に久々に笑顔を見せてくれたし、いけるんじゃないかしら。祭と二人で交渉してみようっど。

北郷は蓮華のウケも悪くないみたいだし、このままあのコを孕ませてもらえば孫呉は安泰かしら……？

幽州では種馬の異名を持っているらしいしね。

連合の時に見たけど、優男だけど芯がしっかりしている感じだった。

うーん、いざとなったら私が北郷の妻に……？

それもありかもしれないわね。

うんうん。祭も未だに「見合う男児があらん」とか言って処女だし、めーりんも張り型とかじゃなくて生身の男を体験してみるのもいいんじゃないかしら……当然私も。

とにかくまずは独立しないとなー！

なんて言っただけ……ああそうそう、公孫賛には後でお礼を言わなくちゃね♪

時は遡り、一刀が行方不明になり、董白が帰還した後の幽州。

「貴様は、私怨で和を乱して軍紀を破り、主を置いておめおめ帰ってきたと」

これほど怒った表情は見たことが無い。誰もがそう感じさせる星の表情。

眼下には董白が跪き、頭を垂れていた。

「……はい」

「その返事、しかと受け取った。雖里、軍法に照らし合わせたら、どうなる」

「……斬首、です」

「決定権はあくまで主の主、白蓮殿だ。如何なさるか。軍法通りに斬るならば某が引導を渡してやる！」

誰もが董白の斬首刑を確信していた。だが、違った。

「落ち着け、星。お前が取り乱してどうする」

「取り乱してなど！」

「いいから下がれ。これは命令だ」

「……御意」

白蓮は董白の前に屈み、話しかける。

「私怨、か。もとはと言えば反董卓連合も麗羽……袁紹の私怨だ。かといって新参だろうが軍法は絶対」

だが、と白蓮は言葉を繋げる。

「一刀が戻ってくるまで、処罰は保留だ」

「……どう、して」

「お前の落ち込みようを見ればな。すでにお前は罪を自覚してる。そして一刀が生きて帰ってきてやっと、罪の重さがはつきりとわかるだろうから。一刀がここ——幽州に帰ってくる前に死ぬなんて……逃げることは許さない」

それと、最終的に処罰は一刀に一任するから結局は一刀が帰るまでは何もできないからな。

そういつて、白蓮は玉座を出ていく。

すれ違いざま、星に呟く。

（お前が一の将なんだろ。お前が一刀の生存を信じなくてどうする）

「っ……！」

——そう、ですな。某に今できることは主の生存を祈ること。
そして、帰って来た時に変わらない某たちの、民たちの姿を見せる
こと。

一刀の帰還を信じ、将たちの絆は再び強く結び直される。

白蓮も、上に立つ者としての自覚が出てきた。

幽州は、さらにその姿を変えようとしていた。

ちなみに、そのころの一刀は。

「ふえ……ふえつくしゅ。ぐすつ、誰か噂でもしてるのかな？」

そんなことを言いながら、甜菜、すなわち砂糖大根の栽培に精を
出し。

「あー今日もいい仕事したなあ」

などと呑気にのたまっていたのだった。

第12話 オモイノキズナ（後書き）

全話加筆修正を行いました。

つきましては一話から再び見ていただくと違いが分かるかと思います。

表記は統一しましたが、抜けているところもあるかと思ひますので、よろしければご一報ください。

第13話 再会と処断（前書き）

行方不明となった一刀。

幽州ではまだ消息不明であり、人々の心に不安が募る。

だが、皮肉にも一刀の消失が、白蓮に幽州太守としての成長を促すのだった。

一方の一刀と言えば、独立の機を伺っている孫呉陣営の下で矢傷を癒しながら、そして農業でリハビリと貢献をしながら日々を送っていた。

第13話 再会と処断

「ふう……」

幽州を離れて早1週間。矢傷も大分癒えてきたし、恩返しのためにもと農業をリハビリを兼ねてやっている。

雨の日は読書で知識を増やしたりと、まさに晴耕雨読の生活を送っている。

だけど、それももうすぐ終わるだろう。

蜂蜜もどき——甜菜で得た資金はそろそろ十分だと思う。最近
は城内がバタバタし始めてきたし、それに雰囲気もピリピリとした
ものを感じる。

しかし……袁家にはあとどれくらいの財産があるのだろう。うちの
州も裕福になったけど、袁家という括りで資産を足したら足元に
及ばない気がする。だって袁術や袁紹個人だけで幽州がギリギリ追
い続けるくらいなんだから。

孫呉——今はそう言うべきかはわからない——は独立に必要な
な、加えて復興や炊き出し、様々な整備に使う資金の余裕が出来た。
それですら袁術の資産の一割にも満たないのではないだろうか。

「北郷」

「あ、何？ 興霸さん」

「仲謀様がお呼びだ」

思索に耽っていたところ、興霸さんに声をかけられる。相変わらずいきなりだったけど、もう慣れた。

「わかった。今行くよ」

暇な時間を見つけては城を歩き回る。オレを拾ったことが袁術たちにはバレないように城外には出られないから、ストレス解消と気分転換の散歩は城内探索になっていった。

見慣れた廊下を辿り、仲謀さんの下へと向かう。

「北郷です。入っても？」

「ああ、入ってくれ」

最初は警戒されていたようだけど、今では大分打ち解けた……と思う。もっとも侍女さんによると、石蝕のおかげで警戒度が少し下がっていたらしいから普段はもっと人を近寄せないオーラが出ているのだろう、興霸さんみたいに。主従って似るのか……

「……北郷」

「はいっ!？」

ヤバイ、声に出してしまった。

「……? 何を驚いている。貴方には随分と世話になった」

「いえ、当然のことをしたまでですから」

そう。資金とか知識とか……本来ならば秘めておくべき事柄だろうけど、有効活用してくれる人には基本的に弱いんだ、オレは。

桃香だつてそう。孫呉の人たちから、といつても全員に会つたわけではないがこの国を良くしていこうという気持ちが感じられる。

「それで呼び出した件だが」

「はい」

「北郷、独立した後の呉に來ないか」

「……はい？」

「呉はいいところだぞ。氣候も温暖だし民の人柄もいい」

……ええとこれは引き抜きということでもいいんでしょうか。

そつといえば反董卓連合で孟徳さんからも勧誘されたっけな。

「民が安心して暮らせる世になったら、いつでも行きますよ」

「……そうか、残念だ。ならば思春！」

え。なにこれ「我らの秘密を知ったからには……」みたいな？

こゝ、殺される――

「北郷を幽州まで送り届ける。勿論安全に、だ」

「はっ」

――わけじゃないのかよかつたー！ 仲謀さんも興霸さん笑わないから怖いんだよ……話が全部シリアスになる。

「重ねて礼を言おう。多くの命が救われたはずだ。本当にありがとう」

手を取られ、彼女の両手から温かな、そして柔らかな感触が伝わってくる。

「こちらこそお世話になりました、仲謀さん、興霸さん」

「蓮華だ」

「え？」

「私の……真名、だ。それとも敬語でなくとも構わない」

「蓮華様が名乗られるのならば。思春だ」

「……あー、じゃ、オレのこと一刀って呼んでほしいな。オレのいたところは姓と名しかないから一刀ってのが真名にあたるみたい」

蓮華さんと思春さん、か。

孫呉を担う人たちの真名を預けてもらえるなんて、光栄の極みだ。

「では、また会おうな……か、一刀」

「うん、またね。蓮華」

別れの挨拶を済ませ、思春さんの後について部屋を出る。思春……さん。うん無理だ。なんか呼び捨てにするのが怖い。でもああ言われたら呼び捨てにするしかないんだろうな……

「一刻後に迎えに来る。それまでに身支度を済ませておけ。清掃関係はこちらでやるから気にするな」

「うん、わかった」

とは言ったものの、持ち物なんて無いため片づける物も少ない。

結局一刻後を待つ間、読書に勤しんでいた。

読書のあと城を出、幽州に入り、見慣れた景色が視界に広がっていく。目先に見えるのは、オレが風・真桜・沙和の3人と出会った村。今では移り住んだ民たちも増え、賑わいを見せている。

「ここまで来たらもう安全かな」

「ならばここまででよいだろう。蓮華様を悲しませるようなことがあったら許さん。平和になったら尋ねるといった以上、約を違えるなよ。では私は戻る」

振り向いて、元来た道を去っていく思春。

見間違いでないならば。言葉の最後に「またな、一刀」と声には出さないが呟いたような気がして。今度から勇気を持って思春と呼ぼうと決めるのであった。

さて……みんなに、会いに行こうか――

で。

「あの、みなさん……動けないんですが」

右足には雛里が。左足には風が。右手には真桜が。左手には沙和が。そして背中には星が。

なんで風がないのかった？ 警邏中らしい。つまりは。

「真桜と沙和はサボりか」

「ええやんそないなこと！ こーしてたいちよが帰って来たんやから警邏なんてどうでもええわ！」

「そうなの！ 警邏より隊長のほうが大事なの！」

気持ちは嬉しいが……

「真桜、沙和。サボりで減給な」

「「ええ〜！」」

町の人に万が一のことがあったらどうするんだ。……風だけでもなんとかかなりそうと思ってしまった。

「お帰り、一刀」

「ただいま……白蓮」

何か白蓮の雰囲気が違う気がする。連合の時、白蓮に孟徳さんみたくオーラを放つようになって欲しいと思ったけど……少し雰囲気が出たかな。

「お前ら、一刀を交えての宴は後回しだ。今は一刀に決定権を委ねた事項がある」

白蓮がそう言うと、星は不機嫌そうに。雛里はビクッ、っとして。真桜と沙和は気まずそうに顔を背け。風は……いつも通りか。けど、少し眉間にしわが寄っているような？

「董白の処遇。それをお前に委ねた。独断での行動は軍法において斬首だ。それを踏まえて、董白に面と向かって処罰を告げてくれ」

ああ、そういうことか。

董白は謹慎でもしてるのだろうが、居心地は最悪だったに違いない。

「わかった」

オレが頷くと白蓮もオレの目をじっと見た後鷹揚に頷き、身を翻して城内へ歩いていく。

「真桜、沙和。警邏に戻れ。星、風、雛里はついて来て」

董白の私室へ向かう。部屋の前まで来ると、武装した兵士が2名、扉の前に立っている。

……逃がさないためか？

「董白、入るぞ」

オレが扉を開ける前に星が開けて中に入ってしまう。

「主のご帰還だ」

「……！」

罪人というわけでもなく、私室で謹慎しているならば待遇は牢獄より格段に良い。だが。瞳は輝きを失い綺麗な黒髪からは艶が消え、少し頬がこけている。それに心なしかいつもは自己主張が激しいツインテールも元気がない。

「あ……」

「主に何か言うことは」

星が董白の胸倉を掴んで、吊り上げるようにして立たす。星のあまりの迫力に、オレは声を出すことが出来ない。

「……さい……なさい」

「言う相手は某ではないのだ、主に聞こえるように言え」

「……ごめん……なさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

自惚れかもしれないが、民のためと色々なことをやってきて、民からも、兵士や文官たちからもそれなりに信頼を勝ち得ていると思っている。その中で、オレの行方不明の原因となったのが軍紀違反をした新参者だというならば。

周囲の視線。全てが自分を責めているように見えるに違いなく、生きていることも辛かったのかもしれない。

自害、または逃亡を謀らないように言ったのは星かな？

「……いいよ、オレはこうして生きて帰って来たんだ」

「う……あ……」

董白を優しく抱きしめる。涙、だろうか。オレの右肩に染み渡っていく。

「うああああん……」

矢傷が癒えた右腕で、頭をゆっくりと撫でる。

彼女が落ち着くまで、こうしていよう。

「軍紀では斬首、だったよね」
「は、はい……」

警邏から呼び戻した三羽烏、星、雛里、風、白蓮。董白の私室に集まった全員が固唾を吞んで俺の言葉を待っているのを感じる。

「軍紀は絶対。新参者であろうが、違反した以上軍法にのっとる——だから董白、君には死んでもらう」

「……うん」

「主、執行は某が——」

「ただ」

「……？」

「姉思いの君だ、姉と同じ運命を辿らせてやろう」

「………！」

桃香についていった月、そして詠と同じ道。これで、董白は「死んだ」。

甘いと言われるかもしれない、けど。死ぬのは楽。一瞬の痛み、苦しみで終わる。

人間なのだから憎しみを持つのは当然。ましてやそれが姉の人生を左右するほどの出来事だったのだから。

董白……彼女が戦場に出ることはもう、無い。

けど、経験を糧にして伝えていけることがあるから。

「董白が侍女兼護衛をこなしてくれればみんなの負担も減るだろうしね」

どうしても太守の白蓮やオレは護衛が嚴重になる。人数が多いからと言って強者に勝てるわけではなく、オレたちに手練れの刺客が来たとしたら。その不安を、星たちが拭い切れていないのは事実。

幽州には有名武将が少ない。星を頂点に風、真桜、沙和と続いたとしてもそれで終わり。前線から外せない人材なのである。

「私は……朧、よ」

「じゃあ明日から早速働いてもらうよ。食事睡眠をしつかり摂ること。髪や肌のお手入れもね」

「一刀、お前が出した答えがこれなんだな」

「ああ。これでいいよ、白蓮」

「よし、わかった」

さつきまで難しい顔をしていた白蓮が一転、晴れ晴れとした表情になる。反面星はまだ納得がいかないような表情をしているが。

「なら明日は祝勝会兼一刀の生還祝いだな」

早速董白……いや、朧の出番だろうか。

明日はメイド服を期待、かな。あ、おっちゃんに頼んでた服を取りに行かなきゃ。

「一刀の部屋は戦前と変わってないからな」

「ああ、ありがとう」

掃除もしておいてくれたのかな。

まずは、町の人に顔を見せに行こうか――

<おまけ>

「こ、この服を着ろって……!？」

「君のお姉さんも着てるみたいだよ」

おっちゃんが広めたらしいけど。アイディアを独占しないおっちゃんはいいい人だよなあ、しかし。

「う……」

「気が進まないなら着なくてもいいよ。だけでもう一度言っておこう。君のお姉さんである月と、詠も、着ているよ」

「うっ……お、お姉さまぁ……」

背中を向けていると衣擦れの音がしてくる。このシチュエーションはっ……!

「き、着た、わよ」

「……おお」

こ、これがギャップ萌えかつ……!

普段気の強い朧がメイド服に身を包み顔を赤らめて目を潤ませな

がら上目づかいで此方を見てくる姿は……すごく、いいです。すごく。

「朝起こすとき容赦しないわよっ!」

……え、オレの侍女なの？ 寝込みを襲われそうだ。性的な意味ではなく。

「ふふん、つかの間の安息を楽しむといいわ」

ノオ——!?

<この話は本編とあまり関係ありません>

第14話 戦乱の予兆（前書き）

幽州に一刀が帰還した。幽州の面々はそれをあたたかく迎える。

しかし、それと同時に董白——朧（おぼろ、董白の真名）の処遇も決まる。

一刀の下した決断、それは。

朧を姉である月と同じ道——真名を捨て、侍女としていくことに決めたのだった。

第14話 戦乱の予兆

一刀の朝は早い。

ランニングをはじめとする体力づくりや、筋トレ、ランニングなど基礎力を高めるもの。そして、素振りや対人での鍛錬。さらにそれが終わると政務、という多忙さだ。

しかし、一刀は朝に弱い。そのため侍女に起こしてもらったのが日課となっている。

ただ。閨を共にした女性がいるときはなぜか侍女の力を借りず自分で起きてその女性を起こさないように静かに出ていく。

これも彼の特殊能力だろうか——ナチュラルに女性を口説くことに加えての。

さて。

昨日帰還した一刀の身体を慮って、幽州の女性陣は閨を共にすることを自重していた。

そのため今日は一人での起床であり。未だに一刀は寝入っている。と、そこへ一人の侍女が入ってくる。

「……北郷様、朝でございます」

「ん……後、5分……」

「起きてください」

「うっん……」

まだ起きない。

「起きてください」

ゆさゆさと一刀の身体を揺する。

まだ、起きない。

「……起きてください」

まだ。起きない。

「……起きろっつってんでしょうがぁ！」

「へぶっ！？」

侍女におもいきり頬をビンタされた一刀の意識は覚醒し、ようやく起きた。

「い、いつてえ……」

「さっさと起きないあんたが悪いんでしょうが」

「あ……臃？　なんで、ってそっいえば侍女になったんだっとな」

そう、臃は侍女になった。“一刀専属の”侍女に。

「あんたの専属の侍女よ」

「……っえ」

「あによその顔は。昨日言ったでしようが」

これからも武将クラスのビンタで起こされるのか、と一刀はげんなりする。

「……なんでもない」

そのまま一刀は起き上がり、服を着替え始める。

（元気になったみたいで、良かった）

「ちょ、何で脱いでんのよ!」

「ん? ああごめん」

普段は脱いだものを侍女がたたむため、脱いだ後は侍女に預けている。そのため一刀は侍女が室内にいるのに慣れてしまっていた。

ちなみに着替えを全部やらせるのはいろんな意味でダメだと一刀が拒否している。

「じゃ、これお願いね」

「あ、うん」

あまりにも自然な感じに脱いだ服を渡され、臍も素直に頷いてしまふ。

「いつてきます」

「はい、いつてらっしゃい……って、あれ? これあたしがたむの?」

その問いに答える者は誰もいなかった。

鍛錬を終え、汗を流して再びフランチエスカの制服に着替える。
ただ、これは新たに仕立て屋のおっちゃんに仕立ててもらったもので、本物はいざという時のためにしまっておりある。

一刀が増設させたクローゼットにはその他バニー・セーラー・スク水・チアガール・体操服^{ブルマ}・メイド服（ロング・ショートスカート両方完備）などなど、いろいろなものが入っているが、それについてはいつか。

「大分政務にも慣れたなあ」

楓（かえで、田豫の真名）の言っていた通りだと、一人心中で頷く。

しかし、しばらく目の疲れる政務から離れて晴耕雨読を楽しんでいた一刀にとっては大変な作業には変わりなかった。

「ふう……」

凝り固まった体をほぐすために伸びをする。

「失礼します」

「あ、はい」

「お茶を、お持ちいたしました」

戸をあけて、私室に朧が入ってくる。お盆にお茶を乗せ、ゆっくりと歩み寄って――

「あつ」

そして茶碗と水差しが飛んで――

びちゃっ サクッ

「熱痛え――！」

お茶が一刀の顔面に、水差しの先（尖っている）が額に刺さった。

「ぐふっ……」

（臙はドジっ娘メイドだったのか……！）

そんなことを呻きながら一刀は必死に痛みに耐えていた。

実際はお盆の上に重さの異なるものが二つ置いてあるため、給仕が初めての臙にとってはバランスを取るのが難しく、足元が疎かになってしまって落ちている本に気付かず躓いてしまったというわけだ。臙にドジっ娘属性は無い。

「ご、ごめん」

「とりあえず水、水！」

火傷を負った部分がしっかりと冷やして政務と再び向き合う。

それも終わり、久々の城下町散歩――つまり視察に出かける。

「御遣い様!!」「お帰りなさ——い!」
「うん、ありがとう」

無事に帰ってきた一刀の姿を一目見ようと、町の人々が集まり、人だかりを形成する。

「愛されてるなあ……」

「女性と一部の男性には性的に、ですな」

「ああ……って星!　そしてなんだ今の不穏な言葉!？」

「なんでもござらんよ」

一刀の耳元で言葉を囁いた星はそのまま一刀の傍に立つ。本来は陰から警護しているのだが、人ごみになるとどうしても刺客の判別が遅れるため傍に来たのだった。

「あれ……」

「どうなさった？」

「いや、いつも会う子連れの綺麗な人がいないと思ってさ。警邏に出るたびにすれ違ってんだけど……」

「なんと。主は街の人妻にまでその食指を……」

「人聞きの悪いこと言うな」

ま、人ごみは危ないからいないんだろう、と一刀は結論付けて先に進んでいく。

見えてくるのは変わらない街並み、人々の温かい笑顔。いつもの風景が、広がっている。

(帰って来たんだなあ……)

幽州を離れていたのは二桁に届くかどうかという短い日数。だが、今までの――元の世界では決して味わうことのできないであろう濃い体験を短時間にした。そして、広いと思っていた中国。全ての人が裕福な生活をしているわけではないと思っていた。

思っていたのだが、現実で目にした光景……特に袁術領での民の生活はひどかった。それ故に、一刀は“蜂蜜もどき”を適正価格以下で孫策に売るように蓮華を通して頼んだのだ。

あまりに高い値段で売るとさらに搾取されるから。ついでに言えば、独立した暁には孫策に民の生活改善を要求している。

「北郷様！」

「どうした」

駆け足で走ってくる兵士に、星が応対する。

「こちらを。では、私はこれにて失礼いたします」

「ああ。文か……主、どうぞ」

「うん、……ははっ」

手紙を一通り眺め、一刀は笑みをこぼす。

「何か良い事でもあったのですかな」

「孫呉……って言うていいのかわからないけど、孫策さんたちが袁術に下剋上、独立。資金も貯まったからね、この調子ならあとひと月もすれば旧呉領は全部呉領になってるんじゃないかな」

「いつかはやると思っておりましたが、案外早かったですね。主の帰還は内部抗争に巻き込まないため、と」

「それもあるけどな。怪我は大分良くなつたし、オレの知りうる知識は教え終わつたし」

「ならば、それより今は曹操と五胡ですな」

「うん……」

歴史を繰り返さないための、一刀。それにおいて五胡に動きが無いのが不安。単体で来るか、連合で来るか。

白蓮は特に“異民族”という括りに拘っている訳でもなく、偏見も無く普通に接している。袁紹に五胡との繋がりはあるのか。

「五胡の人は太守がお人よしだから仲良くできると思っただけだなあ」

「……ククツ、相違ない」

星は心底面白いといった様子で笑う。

太守がお人よしだから部下も、民もお人よしになる。

（どこもそんな人たちならなあ）

頑張ろう。一刀は決意を新たにす。何度目かはわからないが。

陳留、城内の玉座。

一刀が帰還してからひと月が経っていた。

今、魏の重鎮たちが一堂に会している。

「さて……あの男が幽州に戻ったわけだけど」

「はい。加えて軍備もかなり充実してきました。武具、馬、兵糧。何より兵たちの練度は大陸最強を誇るでしょう」

「ふふつ。遂に時が来たわね……」

（劉備を攻めた後に幽州から攻められるのは戦力的に厳しかったから内政と練兵に勤しんだわけだけど）

もうよいでしょう。春蘭も鬱憤がたまっているみたいだし。まずは――

と曹操は宣戦布告先を臣下に告げる……

「まずは関羽を手に入れるわ。劉備を手中に収めれば裏切りはしないでしょうし。此処まで戦力を整えれば呂布と関羽でも大丈夫でしょう。桂花、徐州に――」

はずだった。

「失礼します！」

「なんだ！ 今は軍議中であるぞ！」

「は、ですが徐州の劉備が民を引き連れて南下しているようです。民は気付かれぬように少しずつ移動していたようで……今残っているのは兵のみ。早馬でも追いつくことは不可能かと……」

「……なんですって？」

（徐州領を放棄するっていうの？ 情報が漏れていた？ いいえ、今は先手を打たれたことへの対処を考えるべきね）

思考をすぐさま切り替える。

「それとこのような文が」

「ふむ……………やられたわ」

「華琳様、文には何と……………」

「『徐州はあげます。でも民のみんなはどうしてもついていくと聞かないので連れて行きます。劉玄德』だそうよ。要約すればね。なんでも他に圧政に苦しめられている人々を助けに行くんですって」

一瞬、玉座に沈黙が流れる。

「関羽を逃したのは惜しいけど、徐州が手に入ったから良しとしましょう。関羽はあくまでも保険……………頼りにしているわよ、春蘭」

「はいっ！ 華琳様のために必ずや！」

（民がない州、か……………どうしたものかしら）

「とりあえず本日は解散ね」

新たな問題に頭を悩まされつつ、玉座を後にするのだった。

第15話 新たなる——（前書き）

一刀が帰還し歡喜に沸く幽州に舞い込んだ報。それは孫呉が独立したというものだった。

ひと月後には各地に散らばっていた同朋の協力もあり、旧呉領を支配下に置く。

まだ地盤が完全には固まっていない状況で劉備たちを領内に受け入れた呉。なぜ、両者に繋がりがあったのか。

それは、一人の男—— 一刀によるものだった。

第15話 新たなる――

「えっと、ありがとうございます、孫策さん」

「いーのいーの、御遣いさんからのお願いだし。それに報酬もらってるしねー」

「報酬？」

「そ。お・さ・け」

楽しそうな孫策・黄蓋ら酒豪とは異なり、“断金”の周瑜は頭を抱えていた。

「お、お酒ですか」

同時に、対価がお酒というのもどうなのだろうと諸葛亮も考え込んでいた。

「ああ、いいんだ。酒を貰わずとも彼の頼みは聞いていたさ」

「だよねえ。御遣いさんの頼みだもん」

一刀の評判は孫呉でも上々のようで、それを知った桃香が頬を膨らませていたのを一刀は知らない。

「では、とりあえず西進させてもらいますね」

「ああ。此方にも体面というものがあるから一応監視は付けさせてもらうぞ」

「はい。よろしく願います、周泰さん」

桃香たちの目的は、天然の要塞――蜀を支配下に治め、太守劉璋の悪政から民を救うこと。

一刀という共通の知人——友人を通して、両者は結ばれる。

「しかし雪蓮、思い切った決断をしたものだな」

「んー、まだ地盤固まつてないし蜀からちよっかい出されないと
も限らないしねー。それに……」

言葉を区切り、雪蓮は愛する妹のいる方向を見つめる。

「それに？」

「蓮華が教えてくれたのよ。御遣いさんみたいな人となら共同統治でもいい、っていうか統一しなくてもいいかな、ってね。確かに一国支配のほうが続くかもしれないけど、過去にはそうじゃない王朝もあるわよね。だから賭けてみようかなと思ったのよ、誰にでも優しい……北郷一刀に、ね」

「雪蓮……」

大陸を手中に収めることを目標としていた雪蓮。

袁術配下での苦境、そして一刀との——直接面識は無いが——
交流によって、彼女の考えは変わっていった。

「ふっふーん、見直した？」

「……過去の王朝なんていつ勉強したんだ？ 熱でもあるのか？」

「ぶーぶー！ それくらい知ってるわよ……冥琳私を莫迦にしすぎー……」

その後桃香たちは劉璋の統治下・益州に侵攻。その道中で嚴顔・

魏延と言った猛将を下し、地理を知るその二人に道案内を任せてついに益州を支配することとなった。

そのころの幽州というと。

「西は桃香、南は蓮華たち。後は……」
「曹操だけ、か」

白蓮と一刀は地図に目を落とす。

まだ地盤が不安定な両者ではあるが、確実に敵対することは無いし、むしろ同盟を締結しているとほぼ同様レベルの友好国である。

幽州・孫呉・劉蜀。その全ては基本的に専守防衛で、民が苦しんでいるならばそこを統治下に置くというスタンスである。

しかしながら。

曹魏だけは、大陸を手中に収め、自らの統治下にするることによって民の安寧を図ろうとしている。

そのため青州・徐州を皮切りに西へ克「エン」州・冀州・予州・并州・司州・雍州・秦州・涼州と長く伸びる形になる魏は、後方の憂いを絶つためにもおそらく最初に幽州に侵攻してくるだろうことが予想されていた。

その対策として、近頃は頻繁に軍議が行われていた。

「烏丸や匈奴が怖いんだよなあ……」

「ですね。曹操さんたちと事を構えるにしても国境の警備は怠ることが出来ません……せんっ」

少し頬を赤らめながら囁んだ言葉を訂正する雛里の頭を撫でている一刀を見ながら白蓮はいいなーうらやましいなーとか思いながら他の将に目を移す。

「主戦力は星・凧・真桜・沙和……曹操軍は夏侯姉妹にえーと」

「張遼さん・許緒さん・典韋さんですねー。白馬義従もいますし戦力的には見劣りしないかと思いますが、あっちにも張遼さんがいます。それに将の数が少しばかり足りないのですよ」

魏の有名武將は6人で、対する幽州勢は一刀と白蓮を入れてやっとな6人という現状。

大勢の決していた袁紹軍戦とは違って一刀は御旗として気軽に前線へ投入できるはずもなく、且つ白蓮は大将である。

「華と朧がいればとは思うけど、無い物ねだりをしてもしようがない。現有戦力で対処だな」

そう結論付け、解散。一刀は私室へ向かう。

部屋に入ってベッドに寝転び、天井を仰ぐ。

（桃香も蓮華も今は大変な時期だしな。体制が整うまで魏が攻めてこなければ一番いいんだろうけど……）

それは無理だよな、と溜め息をこぼす。

「主、入っても？」

「ああうん、いいよ」

星が戸を開けて中へと入り、一刀の横へ腰を下ろす。

「星には頑張ってもらわないとね。張遼は白蓮で、三羽鳥のうち
鳳と真桜は許緒、典章にあてることになると思う。沙和は個人とし
ての武よりは統率型だから無理だし……でもやっぱ星1人に夏侯姉
妹は荷が重いよなあ」

星ならば夏侯惇と対峙させても大丈夫という信頼。だが夏侯淵と
対峙させることのできる人材が、いない。

あと1人、欲を言えば弓に長けた武将が欲しい。

太史慈、黄忠、沙摩柯。

「思春さんは呉だし、呂布さんは蜀だしな」

どこかに所属しているとは聞かないその3人を思い浮かべる。

「ほう？ 甘寧殿は弓も得意なのですか？」

「オレの知ってる歴史じゃ有名な話があつてね。その甘寧さんも
また沙摩柯っていう人に射殺されるんだけど」

一刀は知りうる限りの知識——三国志“演義”の話の思い起こ
す。

「でもやっぱ黄忠さんかなー。夏侯淵さんを打ち取ってるし」

「夏侯淵も一騎打ちに手出しをするほど無粋ではないが、他の将兵が標的にされますからな……やはり対抗馬が必要ですな。ま、それはともかく」

「お？ っと」

星は身を翻し、一刀を跨いで馬乗りになる。

「戦が始まればこうしている余裕も無くなりますからな、今のうちに」

舌舐めずりをする星を見て、

「はは……まあ、それには同感だよ」

一刀は星の頬に手を添え、ゆっくりとその顔を近づけていく。

星も、一刀も目を閉じて――

「北郷將軍！ よろしいでしょうか！」

「……むう。某はこんなことが良くありますな」
「確かにね」

苦笑いしながら一刀は扉に向かって返事をする。

「何かな」

「太守様がお呼びです。至急いらっしゃるようにとの仰せでした」

「先程軍議を終えたばかりだというのに白蓮殿はまったく……」

「わかった、今行く」

「はっ、では失礼します」

一刀が行くからには星も行くほかない。ぐちぐちと文句を言いながらもしっかりと一刀のあとをついて行く星だった。

「一刀……お前に、お・ま・え・に、用があるそうだ」

少しばかり黒いオーラを発しながら涙目で睨みつけてくる白蓮をひとしきり慰めた後、一刀はその人物と対面する。

「ああ、お久しぶりですね。最近は見かけませんでしたけど、何かあったんですか？ 今日はお子さんもお連れしていないようですし……」

「娘は友人のもとへ預けてきましたわ。友人の求めに応じて少しばかり帰郷していたのですが、そこも落ち着きました。ですのでぜひ、御使い様のお力になりたいと。そうですね……少し時間をいただけますか」

場所は変わって練兵場。一刀と星は期待に胸を膨らませていた。

「……主、ひよつとすると」

「うん、あるかもしれない」

練兵場で、先程の女性の腕前を見ることになっている——弓、

「では、失礼いたします」

「こちらこそ」

互いに武器は訓練用の先を潰した矢、槍。対峙するのは星である。

「……始めっ！」

一刀の合図とともにすかさず弓矢を放つ。

（早いっ……それも三連射だど？）

懷に飛び込めさえすれば勝負はつくのだが。迫りくる矢を幾度となく払い落としながら星は近寄る術を考える。

「……ここだッ！」

「っ！ くっ……」

流石というか、速さには自信がある星。喉元に槍を突きつけようとするが――

「ちいっ！」

弓本体で打撃を防がれ、すかさず距離を取る。

「星、終わりだ。もう實力はわかったよ」

「しばしお待ちを、と言いたいところですが。勝敗が目的ではありませんからな、仕方ない」

「では……？」

「うん、貴女の実力はわかったよ。これから宜しく願います」
実力を見定めた一刀は戦いをやめさせ、女性に手を差し出す。

「わたくしは黄漢升と申します。以後、紫苑とお呼びくださいませ——ご主人様」

誰もが見惚れるような笑みで、彼女は名を告げた。

（子供いるけど若いから太史慈さんかなー出生地も近いからなー
と思ったら黄忠さんだとっ！ いやでも日本でも15歳で元服だし
5歳前後のお子さんなら20歳くらいでもありうるのか……）

なんというか、幽州に弓を得意とする武将が加入するとともに
“色気”という属性が付加された。

そんな他愛もないことを考えていた一刀だった。

第15話 新たなる――（後書き）

さて……紫苑さんを北郷軍に入れてバランスを取りました。最初のほうで出た綺麗なお母様とお子さんは紫苑と璃々ちゃんですね！あんなの別に伏線じゃねえよって思われたらすみませんとしか言いようがないというか伏線を張るということ自体がまだ難しく……

第16話 開戦（前書き）

黄忠——真名：紫苑を迎えた幽州。

それに襲い掛かるは曹操軍……

今、開戦。

第16話 開戦

「行ってしまいましたな」

「うん」

でも、しょうがないかも。

「説得が必要ないとのことでしたが」

「うん」

そう、必要ないと思う。彼女の気持ちは、きっと変わらないから。だつて――

「御遣いとやらはそこまでの人物なのでしょう」

「うん」

―― 一刀さんに、惹かれてしまったのだから。

「会いたいな……」

「儂も会ってみたくありますのう。桃香様と紫苑がここまで懸想するそ奴に」

平和になればいつだって会える。でも、戦力で劣っている場合に戦争が起こった時に戦争をやめてとお願いするのは、相手からすれば命乞いに他ならない。対等な立場でなければ話すら聞いて貰えない。争いをなくすことを謳ってきたけど、だからこそ。

（私もいろいろもつと、頑張ろう。みんなに心配をかけないで…
…自分の身くらい自分で守れるように）

「桔梗さん、弓を教えてください」
「……儂の特訓は厳しいですぞ？」

一瞬顔をキョトンとさせた桔梗さんが口角を上げてニヤリと笑むのに背筋の寒さを覚えながらも――

「やります！」

――決意が揺らぐことは無かった。

「さて、緊急の軍議を開いたのには当然理由がある」
「ついに来たか……」

曹魏、幽州へ宣戦布告。

徐州を手中に収め、さらに領土を拡大した曹操。その次の矛先はうち、幽州だった。

当然といえば当然である。地盤が固まっていない南方に進出しても良いが、孫呉は防衛戦かつ経験豊富な水上戦のため比較的楽な戦闘に持ち込めるし、さらに曹魏の領土は位置関係上で孫呉と関係が良好な幽州に挟撃される恐れがある。幽州を狙うのならば孫呉は陸戦・侵攻戦のため孫呉は援軍も出せないだろう。

すでに曹操軍は西涼方面に進出しているため、これ以上攻撃を受けるリスクを避けたいのだ。孫呉と同様に劉蜀も地盤が安定していないわけだし。

史実を考えれば、西涼軍の残党は蜀に亡命するのかな？ 鳳徳と
かいたら魏になるだろうけど。連合の時はいなかったと思うが……

ま、それはともかくだ。

「雛里、五胡に対する備えも当然必要だよな？」

「はい、むしろ今まで動きがなかったことが異常です。袁紹軍と
の戦いはこちらが短期戦で勝つことを見越したのかもしれませんが。
ですが相手が曹操軍となると……」

「戦が長引くから、好機というわけか」

反董卓連合で軍勢が終結した際もある程度余力を残して参加した。

だが、今回は総力戦になるだろう。五胡に対する備えも幾分か減
らさなくてはならない。

「白蓮、今は妹さんがいつてるんだっけ？」

「ん？ ああ、紅蓮と睡蓮なら……じゃなくて範と越ならそれぞ
れ遼東と遼西に行ってるな」

遼東。リャオトン半島としても日本人が知っているであろう土地
だ。当然ここからは距離がある。

「遼東はそのまま、遼西は最低限の人数を残して引き上げるか」

「そうだな……うん、一刀の言う通りでいいだろう。大丈夫か、
雛里？」

「はい、仕方ありません」

紫苑が加わって将たちの負担が大分減るな。それでも魏の国力を

考えれば総力戦でわずかに上回る程度、なおかつ北方の警戒もしなければならぬので五分五分といったところになるだろうか。連携や指揮系統の乱れがあったらすぐに押されてしまうだろう。

「五胡が攻めてこなければいいが……」

「そうつまくはいきませんでしょうか」

「星……。まあ、な……」

「伝令、伝令っ！」

きたか……。

「曹操軍が我が領土へと侵攻を開始！」

前もって前線からは民、兵士、倉庫内の物資すべてを引き払った。本城で防衛戦を展開、隙を見て攻勢に出る。勝てば戦況次第ではそのまま追走するし、厳しければ追い払ったことで良しとする。

幽州勢単独で侵攻戦に持ち込めない場合は孫呉・劉蜀に余裕ができるまで防衛戦を続けるしかない。幸いにして物資は沢山ある。

戦力の分散配置を避けて戦力を集中させる。

曹操軍をもつてすれば小城などでその勢いを止めることはない、むしろ人がいないことによって伏兵を警戒させる……なんてまだまだ素人考えだ。

人がいようがいまいが当然侵攻戦では伏兵を警戒するわけだし。

もう距離的には半分を切っているところあいだろうか。そろそろ警戒の度合いを高めねばならない。

足が、腕が、全身が震える。反董卓連合や対袁紹の防衛戦などは比べ物にならないほどの重圧。

そっ……。

肩に感じる温かい感触。

「一刀」

「白蓮……」

スウっ、と震えが引いていくのがわかる。

「最近さ、思ってたんだ」

「うん？」

「なにも曹操と戦わなくてもいいんじゃないか、降伏すれば民への苦しみはもとより兵士たちの安全も保障される。俺たちは殺されるかもしれないし、なにかしらの職をもらってどこか遠隔地へ、はたまた取り立てられて重用されるかもしれない」

「一刀……」

ああ、そんな目をしないでくれよ白蓮。俺が本当に言いたいのはそのじゃない。

「でも」

前を向いて、曹操軍がやってくるだろう方角に目を移す。

「決して、万能じゃない」

治世の能臣、乱世の姦雄と称された曹操だって。

「確かに仕事はできるし武芸にも秀でているみたいだけど」

王として本拠地に構えるのが必然であり、遠方には部下を置いてその周辺地の政「まつりごと」を任せなければならなくなってくる。

「委任した部下がどれだけ忠心高くたってその末端まで行くとどうだかわからないよね」

たとえ君主、曹孟徳が信賞必罰を掲げていたとしても、それは中心——機能中枢から離れるに従ってどうしても影響力は低くなっていく。

「それを起こさせない、或いはそういう綻びを補うのが俺たちであって、桃香たちや呉の面々だと思う」

蜀だって呉だって民が安心して暮らせる世であれば統一つまり領土的野心は持たないだろうと俺は思っている。これはきつと願望もかなり入り混じっているのだろう、けど。

「自画自賛するようだけど俺らは幽州の民に好かれているよ。それを武力で進行してきた曹操軍には、治安の整った——法で安心が保たれる街だとしても——違和を感じざるを得ないだろうね」

それぞれの土地には、それぞれに合った政治が。決して緩いというわけではなく厳しいというわけでもない。

北東には俺たちが。南方には呉が、西方には蜀が。本当は北西に馬家がいて、中央を曹操が……。

理論論だけどそれでいいんじゃないか、それがいいんじゃないかと思うんだ。

「だからさ、白蓮。この戦……勝とうな」

「……ああ！」

しっかりと右手を繋ぎ合って互いの想いを伝えあう。

「……敵騎影、見えましたッ！」

ついに開戦、か……。

「華琳様、敵は戦力を城に集中させ防衛戦を行うようです」

「ふむ……妥当ね」

ほぼ互角の戦力で野戦を張るよりも一般的に3倍以上の兵数が必要とされるといわれている攻城戦に持ち込めば勝機は高まる。

幽州は農・商・工業どれをとっても栄えているわけだから資源の枯渇を待つことも出来ない、か……。

「ご苦労様、桂花。この戦い、覇権を握るといつても過言ではないわね」

幽州と蜀・呉は友好的な関係にあると聞く。それもまた『あの男』という接点があつてこそだ。

「ふふっ……」

そう、それでこそ。

私が肉親以外で唯一認めた男……。

「楽しませてもらうわ」

第16話 開戦（後書き）

そろそろ終盤でしょうか。

展開に困ること多々ありましたし、これからもあるかもしれません。

しかし処女作として、全力を尽くしていきたいと思います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4119o/>

真・恋姫†無双-白龍翔天-

2011年10月30日07時04分発行